

リトアニア語における二項述語の格枠組みと他動性

櫻井 映子

0. はじめに¹

本稿では、まず本節で、リトアニア語の他動性交替の地域言語学のおよび類型論的特徴について概観する。その上で、角田(1991)による意味論的分類に従って、リトアニア語における、動詞の格構造と意味の関係を示し、二項述語の格枠組みが意味論的な他動性の程度を反映した階層をなしている、という角田の仮説の妥当性について検討してみたい。

拙論(櫻井映子 2014a)においてすでに論じたように、他動性交替の点から見て、リトアニア語は、使役接辞 *-(d)in-/(d)y-* や再帰接辞 *-si-/s* をもつ派生動詞が非常に生産的であることを特徴とし、自動詞と他動詞を多くの場合形の上で区別する言語である²。使役接辞 *-(d)in-/(d)y-* は、基本的に、*augti*「育つ」→*aug-in-ti*「育てる」のように動詞の語幹に付加される(ときに *rimti*「静まる」→*ram-in-ti*「静める」のように母音交替をとまなう)。接尾辞 *-è-* をともなう自動詞の場合は、*did-è-ti*「増える」→*did-in-ti*「増やす」のように接尾辞 *-è-* と交替する。一方、再帰接辞 *-si-/s* は、単純動詞から再帰動詞を形成する場合、*prausti*「体を洗う」→*prausti-s*「自分の体を洗う」のように語末に付加する。それに対して、単純動詞に接頭辞を付けて形成された派生動詞の場合は、接頭辞の直後に再帰接辞 *-si-* を挿入する。たとえば、*prausti*「体を洗う」に接頭辞 *nu-* を付けて作られた、完了的な意味をもつ複合動詞 *nu-prausti*「体を洗う・洗い終える」から再帰動詞をつくる場合、*nu-si-prausti*「自分の体を洗う・洗い終える」となる³。

本稿では、Nedjalkov & Sil'nickij (1969)に基づき、「使役 *causative*」と「反使役 *anticausative*」を以下のように定義する。すなわち、形態的に関連付けられる2つの述語が、意味的に、

¹ リトアニア語は、屈折型、主格対格型の言語であり、名詞類は、性(男性と女性)、数(単数と複数)、および、格(主格、属格、与格、対格、具格、位格、呼格)を区別し、動詞は、人称(1・2・3人称)および数(単数と複数)を区別する。動詞の基本的な時制は、現在、過去、未来であるが、過去時制には一般過去形と接尾辞 *-dav-* をともなう習慣過去形の2タイプがある他、存在・連辞動詞 *būti* と能動/受動の形容詞的分詞を組み合わせた分析的な時制形がある。語形変化が豊富であるため語順は比較的自由だが、SVOが優勢である。

² ここでは、便宜上、他動詞は直接格要素を2つ(主語と目的語)をとる動詞、自動詞は直接格要素を一つ(主語のみ)をとる動詞と定義している。使役接辞 *-(d)in-/(d)y-* および再帰接辞 *-si-/s* はいずれも、自動詞にも他動詞にも付加される。

³ なお、リトアニア語では、否定辞も、*ne-prausti*「体を洗わない」のように、動詞の前に付加されるが、再帰動詞の場合は、やはり否定辞の直後に再帰接辞 *-si-* を挿入し、*ne-si-prausti*「自分の体を洗わない」ようになる。

因果関係を表す抽象動詞 CAUSE の有無によって以下のように対立する場合：

述語A：[出来事2]

述語B：[出来事1] CAUSE [出来事2]

述語Bの方が述語Aより形態的に複雑であれば、述語Bは述語Aに対する使役形であり、述語Aの方が述語Bより形態的に複雑であれば、述語Aは述語Bに対する反使役形であるとする⁴。

リトアニア語においては、使役接辞 *-(d)in-/-(d)y-* の付加による使役化が自動詞から他動詞を派生する最も生産的な方法であり、再帰接辞 *-si-/s* の付加による反使役化が他動詞から自動詞を派生する最も生産的な方法である⁵。北ヨーロッパおよびバルト海周辺地域では、一般的に、アイスランド語、スウェーデン語、ロシア語のように、他動詞を基とし、それを再帰接辞の付加によって自動詞化（脱他動詞化）するタイプの諸言語が優勢であると考えられている（Nichols et al 2004）。この点に関連して、Haspelmath (1993) が作成したリトアニア語の31対の自他動詞のリストによれば、使役化型6.5対に対して、反使役化型は18.5対と明らかに優勢であり、リトアニア語も自動詞化が優勢なタイプの諸言語に含まれるかに見える。

だが、Haspelmath (1993) の選択した語彙に従って、筆者と Polonskaitė がリトアニア語の同じ31対の自他動詞のリスト（表1）を作成したところ、使役化型9対、反使役化型8.5対でほぼ同数となった（櫻井 2014b）。一方、Nichols et al (2004) で挙げられているリトアニア語の18対の自他動詞のリスト（表2）を作成してみたところ（Nichols et al はリトアニア語のデータを示していない）、使役化型7.5対、反使役化型3対という結果が出た。このことを検証するためのデータとして、筆者と Polonskaitė があらたに作成した、より網羅的な自他動詞のリスト⁶の集計結果では、使役化型と再帰化型の数に大きな違いは見られな

⁴ なお、Haspelmath (1993)やNichols et al (2004)に用いられる「非使役 Non-causative」という用語は、語彙的に使役的意味を有さない動詞を指すものであり、主に派生法を指して用いられる用語「反使役 anticausative」とは区別される。

⁵ 本稿では、使役化と他動詞化、反使役化と自動詞化という概念をそれぞれ区別して論じる。その理由としては、使役接辞 *-(d)in-/-(d)y-*が自動詞のみならず他動詞を使役化することもある一方、使役接辞の付加以外にも自動詞を他動詞化する方法があること、再帰接辞 *-si-/s* の付加による他動詞の自動詞化には反使役化以外の場合もあることが挙げられる。

⁶ このリストは、リトアニア語の基本語彙の動詞をリトアニア語ーロシア語辞典（Lyberis 2005）から抽出して自他の区別を付したリストをまず作成し、さらに、自動詞と他動詞の対の形態論的・派生的関係を明示したリストを作り直すという手順で作成した。なお、このリストは、平成22～25年度国立国語研究所共同研究プロジェクト「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性」（研究代表者：ブラシャント・パルデシ）の補助を得て作成、2012年に完成したものである。リスト自体は未発表であるが、集計結果の概要は拙論（櫻井 2012, 2014a）において示されている。

かった (櫻井 2012, 2014a). これは, Haspelmath (1993) の選択した語彙に従って筆者と Polonskaitė が作成した, リトアニア語の 31 対の自他動詞のリスト (表 1) と同様の結果である. 以上のことから, リトアニア語は, 他動詞を基とし, これを派生的に自動詞化するタイプが優勢な地域にありながら, 中立型あるいは双方向型の言語である, と筆者は結論する.

表 1: 筆者と Polonskaitė が作成したリトアニア語の自動詞と他動詞の 31 対 (Haspelmath 1993) のリスト (<http://watp.ninjal.ac.jp>)

Causative: 9, Anticausative: 8.5, Labile: 1.5, Equipollent: 6.5, Suppletive: 0.5				
	Haspelmath (1993: 104) Table 4, 31 pairs ranked in the ascending order	Non-causative	Causative	Type of morphological relation
1	'boil'	virti virti	virti virinti	Labile Causative
2	'freeze'	šalti	šaldyti	Causative
3	'dry'	džiūti	džiovinti	Causative
4	'wake up'	busti	budinti	Causative
5	'go out / put out'	gesti	gesinti	Causative
6	'sink'	skęsti grimzti	skandinti gramzdinti	Causative Causative
7	'learn / teach'	mokytis	mokyti	Anticausative
8	'melt'	tirpti lydytis	tirpinti lydyti	Causative Anticausative
9	'stop'	(su)stoti	(su)stabdyti	Causative
10	'turn'	krypti suktis	kreipti sukti	Equipollent Anticausative
11	'dissolve'	tirpti tirpti	tirpinti tirpdyti	Causative Causative
12	'burn'	degti degti	degti deginti	Labile Causative
13	'destroy'	griūti irti	griauti ardyti	Equipollent Causative
14	'fill'	pilnėti	pildyti	Equipollent
15	'finish'	baigtis	baigti	Anticausative

16	'begin'	prasadėti	pradėti	Anticausative
17	'spread'	sklisti plėstis	skleisti plėsti	Equipollent Anticausative
18	'roll'	riedėti ristis	ridinti risti	Equipollent Anticausative
19	'develop'	vystytis lavintis	vystyti lavinti	Anticausative Anticausative
20	'get lost / lose'	išnykti	prarasti	Suppletive
21	'rise / raise'	kilti keltis	kelti kelti	Equipollent Anticausative
22	'improve'	gerėti tobulėti	gerinti tobulinti	Equipollent Equipollent
23	'rock'	suptis linguoti	supti linguoti	Anticausative Labile
24	'connect'	syti jungtis	sieti jungti	Equipollent Anticausative
25	'change'	kisti keistis	keisti keisti	Equipollent Anticausative
26	'gather'	rinktis	rinkti	Anticausative
27	'open'	atsidaryti	atidaryti	Anticausative
28	'break'	lūžti	laužti	Equipollent
29	'close'	užsidaryti	uždaryti	Anticausative
30	'split'	skilti	skelti	Equipollent
31	'die / kill'	žūti mirti	žudyti žudyti	Causative Suppletive

表 2: 筆者と Polonskaitė が作成したリトアニア語の自動詞と他動詞の 18 対 (Nicholas et al. 2004) のリスト

Augmented: 7.5, Reduced: 3, Ambitransitive: 1, Neutral: 5, Suppletive: 1.5			
	Non-causative	Causative	Type
1	juoktis 'laugh'	juokinti 'make laugh'	Neutral (double derivation)
2	žūti/mirti 'die'	žudyti 'kill'	Augmented/Suppletive
3	sėdėti 'sit'	sodinti 'seat'	Augmented

4	valgyti/misti 'eat'	valgydinti/maitinti 'feed'	Augmented
5	mokytis 'learn'	mokyti 'teach'	Reduced
6	matyti 'see'	rodyti 'show'	Suppletive
7	pykti 'be/become angry'	pykdyti 'make angry'	Augmented
8	bijoti 'fear, be afraid'	baidyti 'scare'	Augmented
9	slėptis 'hid, go into hiding'	slėpti 'hide'	Reduced
10	virti 'boil'	virti/virinti 'boil'	Ambitransitive/Augmented
11	degti 'burn, catch fire'	degti/deginti 'burn, set fire'	Ambitransitive/Augmented
12	lūžti 'break'	laužti 'break'	Neutral (ablaut)
13	atsidaryti 'open'	atidaryti 'open'	Reduced
14	džiūti 'dry'	džiovinti 'make dry'	Augmented
15	(iš)tįsti 'be/become straight'	(iš)tęsti/(iš)tiesti 'straighten'	Neutral (ablaut)
16	kabėti 'hang'	kabinti 'hang'	Augmented
17	(ap)virsti 'turn over'	(ap)versti 'turn over'	Neutral (ablaut)
18	(nu)kristi 'fall'	(nu)kręsti 'drop'	Neutral (ablaut)

さて、本稿では、以上に示したリトアニア語の自他交替現象の概略を念頭に置き、角田 (2009 [1991], Tsunoda 1981, 1985) において提示されている二項述語階層 (表 3) に従って、リトアニア語の格枠組みを調査し、これと他動性がどのように関係しているかについて検証する。角田は、他動性を項構造のみならず意味構造からも捉える必要があると考え、この二項述語階層について、①表の左の方ほど動作的で右の方ほど状态的、②左の方ほど対象に影響の及ぶ度合いが大きい、③左の方ほど品詞は動詞で現れやすく右の方ほど形容詞その他で現れやすい、という仮説を立てている。Tsunoda (1985: 387) によれば、「相手に及び、かつ、相手に変化を起こす動作を表す動詞」は原型的他動詞であり、「参加者が二人 (動作者と動作の対象) またはそれ以上いる。動作者の動作が対象に及び、かつ、対象に変化を起こす」のが原型的他動詞文である。つまり、二項述語階層の最も左側に配されるのが原型的他動詞文であり、通言語的に見て、基本的に主格対格構造の言語であれば、主語が主格、直接目的語が対格という格枠組みをもつ動詞は左側に現れやすく、右側にはそれ以外のより自動詞的な格枠組みが現れやすいと考えられる⁷。

⁷ 筆者は、すでに過去の論文 (櫻井 2007) において、角田 (1991) による原型的他動詞および他動詞文の考え方、他動性をプロトタイプの観点から分析する方法を導入し、リトアニア語におけるアスペクト性と他動性の問題を状況語的過去分詞と主動詞の組み合わせについて論じている。

表 3: 二項述語階層 (角田 2009 [1991]: 101)

類	1		2		3	4	5	6	7
意味	直接影響		知覚		追求	知識	感情	関係	能力
下位類	1A	1B	2A	2B					
意味	変化	無変化							
例	殺す, 壊す, 温める	叩く, 蹴る, ぶつか る	see, hear, 見つけ る	look, listen	待つ, 捜す	知る, わかる, 覚える, 忘れる	愛す, 惚れる, 好き, 嫌い, 欲しい, 要る, 怒る, 恐れる	持つ, ある, 似る, 欠ける, 成る, 含む, 対応する	できる, 得意, 強い, 苦手, good, capable, proficient

これに対し, Malchukov (2005) は, 一項述語への連続性も考慮し, 動作者 (上列) と経験者 (下列) を区別した図 1 のような二次元的な他動性に関する動詞の階層, および, さらに図 2 のような包括的な意味地図を提案した。

図 1: Two-dimensional verb type hierarchy (Malchukov (2005: 81))

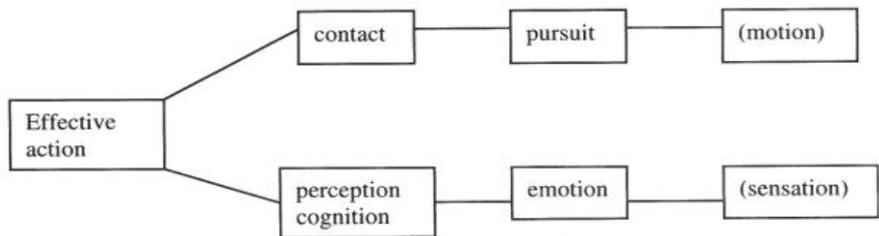
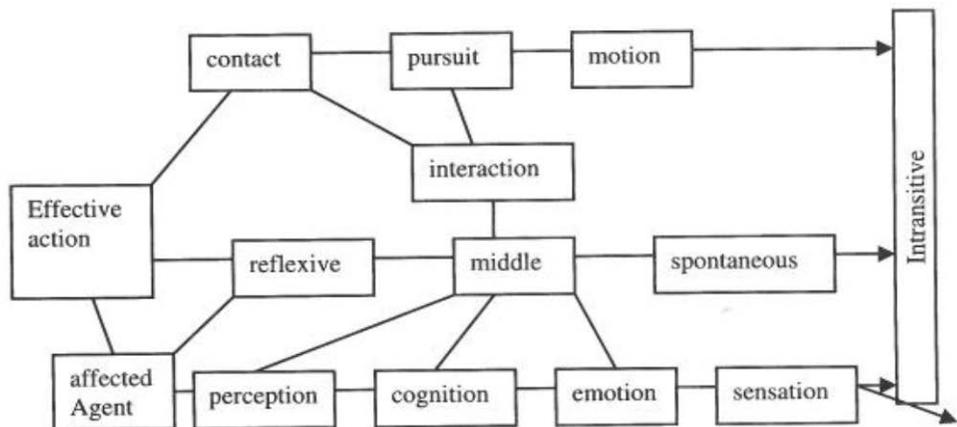


図 2: A Comprehensive semantic map for transitivity splits (Malchukov 2005: 113)



なお、すでに拙論 (2007, 2012, 2014a) でも言及してきたように、伝統的なリトアニア語研究においては、他動性は、主に他動詞と自動詞の形態論的な問題に限定して論じられている。Hopper & Thompson (1980) が指摘したように、類型論的に見れば、他動性の問題は、動詞の語彙、テンス、アスペクト、モダリティとも緊密に相関するが、そのような観点からのリトアニア語の他動性に関する詳細な議論はいまだ十分になされているとは言い難い (LKG, DLKG, LG, Paulauskienė 1979, Ambrazas 1984, Geniušienė 1987, Holvoet & Judžentis 2003, Holvoet & Semenienė 2004, Holvoet & Mikulskas 2005)。今後、通言語的側面からリトアニア語の他動性の問題に関して議論されるべき点は多くある。まず、リトアニア語では、一般的に、意味論的に見て非原型的な (すなわち、より自動詞的な) 他動詞の場合に直接目的語がしばしば対格以外の格を取る。また、不定量の主語あるいは直接目的語は原則として属格を取る他、バルト・スラヴ諸語に共通して見られるように、否定の他動詞文の直接目的語および存在否定文の主語は義務的に属格をとる (いわゆる「否定の属格(生格)」)。さらに、心理的・生理的経験、感情・感覚、必要、欲求・願望などを表す述語は、他動詞的な主格対格型とは異なる格枠組みをとる、といったこと等である。

それでは、以下、角田 (1991) の階層に従って、リトアニア語における二項述語階層と他動性のかかわりについて、主に次の3点に着目して考察を進める：

- (i) 肯定文の直接目的語が対格をとるか。
- (ii) 否定文の直接目的語が属格をとるか。
- (iii) 不定量を表すために肯定文の直接目的語が属格をとるか。

上の3点について、本稿では以下のような予測をもとに検討する。まず、(i)に関しては、おそらく角田 (1991) の指摘通り、リトアニア語でも、原型的他動詞を始め、他動性の程度の高い動詞は、肯定文で動作主が主格、動作の対象が対格をとる、いわゆる主格対格型であるのに対して、非原型的他動詞、中でもより自動詞的な意味をもつ動詞ほどそれとは異なる格枠組みが現れると考えられる。また、(ii)に関しては、主格対格型の原型的他動詞の場合、否定文の直接目的語が属格をとるいわゆる「否定の属格」が必ず見られるが、より自動詞的な意味をもつ動詞の場合はどうか。さらに、(iii)に関しては、リトアニア語では、肯定文において他動詞の直接目的語が不定量であることを示す、いわゆる「不定量の属格」が見られるが、動詞の他動性の程度とこの現象の間に何らかの関係はあるか。

その他、他動性の程度の高い1類と2類の動詞については以下の(vi)の点、また、1類の動詞に限定して、さらに、(v)の点も検討する：

- (iv) 語彙的に対応する自動詞、あるいは、自動詞的な格枠組みをとる動詞が派生可能か。
- (v) 動作が対象に変化あるいは影響を及ぼすことを (義務的に) 表すか。

(iv)に関しては、語彙的に対応する自動詞をもつのは、主に、動作が対象に直接影響を及ぼし、対象に変化を起こすことを意味する原型的他動詞であろう。(v)に関しては、表される動作の影響が対象に及ぶことを表すか否かは、その動詞のアスペクト的意味とも関わりがあることが予想される。リトアニア語では、概して接頭辞によって動詞に限界性の意味がもたらされる。多くの場合、有接頭辞動詞は有標の限界動詞であり、無接頭辞動詞は非限界動詞である。動作の対象への影響が確実に及ぶことを表すには、限界動詞を用いる。一方、他動性の程度の高い動詞でも、非限界動詞を使えば影響が対象に及ばないことを表し得るのである。

それでは、以下、第1節から第7節まで、角田(1991)による意味論的分類に従い、1類「直接影響」、2類「知覚」、3類「追及」、4類「知識」、5類「感情」、6類「関係」、7類「能力」の順に、二項動詞の意味と項構造の関係を示していく。また第8節から第11節では、Malchukov(2005)の提案を参考に、「移動」、「感覚」、「相互行為」、「再帰・相互」を意味する動詞についても言及する。最後に、第12節で全体をまとめる。

1. [1類：直接影響]の動詞

1.1. [1A類：直接影響・変化]の動詞

[1A類]の動詞は、動作が対象に直接影響を及ぼし、対象に変化を起こすことを意味する原型的他動詞である。このタイプの動詞の場合、リトアニア語では原型的な他動詞文の格枠組みが現れる。すなわち、動作主が主格をとり、動作の対象が対格をとる。また、動作の対象に影響の及ぶことが前提であるので、「殺したが死ななかつた」、「壊したが壊れなかつた」、「温めたが温まらなかつた」という日本語文の直訳に相当するリトアニア語の表現は非文である。だが、リトアニア語では、無接頭辞の単純動詞の多くは非限界動詞であり、過去形において動作の持続性・継続性を表す。これらの無接頭辞・非限界動詞によって、たとえば、「壊していたが壊れなかつた」、「温めていたが温まらなかつた」という表現がそれぞれ可能である。重要なことは、「殺す」のような限界性のとくに高い語彙の動詞については、無接頭辞動詞の過去形も、必然的に動作の達成・完成を表す(櫻井2007)ため、動作が対象に直接影響を及ぼさないことを表せないことである。これは日本語で「殺したが死ななかつた」のみならず、「殺していたが死ななかつた」という表現も非文であることと同様であり、通言語的な現象と言えよう。

また、リトアニア語では、日本語におけると同様に、動作の達成・完成およびそれによって起こる状態変化というアスペクト的意味をもつことが、語彙的な自他対応が起こる意味的条件となっている。今回取り上げている二項述語を構成する動詞のうち、この条件を満たしているのは[1A類]の動詞であり、このタイプの他動詞は、一般的に、語彙的に対応する自動詞を有している。すでに前節で述べたように、リトアニア語の自動詞と他動詞の対の派生関係は中立型あるいは双方向型である。たとえば、žudyti“(人)殺す”，laužti

“壊す”, šildyti “温める・暖める”は、いずれも対応する自動詞 žūti “(人が事故などで)死ぬ”, lūžti “壊れる”, šilti “温まる・暖まる”をもつ他動詞である。形態論的には, žudyti “(人を)殺す”, šildyti “温める・暖める”は、自動詞に使役接辞-y-を付加して形成される派生的使役動詞であり, laužti “壊す”と lūžti “壊れる”は、語幹の母音交替によって形成される対である。

他動性の観点から, [1A 類] の動詞の特徴を, 以下のようにまとめることができる:

- (i) 肯定文の直接目的語は義務的に対格をとる。
- (ii) 否定文の直接目的語は義務的に属格をとる。
- (iii) 有接頭辞・限界動詞の場合, 不定量を表すために肯定文の直接目的語が属格をとる。
- (iv) 語彙的に対応する自動詞をもつ。
- (v) 「殺す」以外の無接頭辞・非限界動詞は, 動作が対象に変化を起こさないことを表す。

なお, リトアニア語では, 「殺す」, 「死ぬ」を意味する動詞の使い分けに, アニマシーが関わっており, 「人」⁸とそれ以外の生き物の明確な区別がある。他動詞 žudyti “(人を)殺す”および対応する自動詞 žūti “(人が事故などで)死ぬ”, さらに, 他動詞 žudyti “(人を)殺す”と補充法による対をなす自動詞 mirti “(人が病や寿命で)死ぬ”は, 動作主および動作の対象が「人」である場合に限り用いられる。それ以外が動作主および動作の対象となる場合は už-mušti “(人あるいはそれ以外の生き物を)殴り殺す, 叩き殺す”に対して nu-gaišti “(人以外の生き物が)死ぬ”等, 別の動詞を用いる(例文(1a))。この už-mušti の其動詞である mušti “(人あるいはそれ以外の生き物を)殴る, 叩く”は, 動作が対象に変化を起こさないことを表す(例文(1a-v))⁹。

⁸ 厳密に言えば, 「人」と同等かそれ以上のものがこれに含まれる。たとえば, 古来養蜂に従事してきたリトアニア人にとって重要な存在である「蜜蜂」に対しては, 「人」と同じ動詞を用いる。

⁹ リトアニア語では, 一般的に, 接頭辞づけという方法によって非限界動詞を限界動詞化することが可能である。語彙的な(本来的な)限界動詞にも接頭辞を付加することが可能であるが, その場合の接頭辞の役割は動詞の限界性を強調・強化するに過ぎず, 語彙的限界動詞はふつう接頭辞なしで限界的な場面を表し得る。たとえば, 「死ぬ」のようによくに限界性の程度の高い動詞の場合, 無接頭辞・単純動詞を用いる方がより一般的である(例. Jis žuvo “彼は(事故などで)死んだ”, Jis mirė “彼は(病や寿命で)死んだ”)。

- (1) a-i. Jis nu-žudè tą kareivj.¹⁰
 彼.3M.SG.NOM PREF-殺す.PST.3 その 兵士.M.SG.ACC
 彼はその兵士を殺した。
- Jis už-mušė tą mušę.
 彼.3M.SG.NOM PREF-殺す.PST.3 その ハエ.F.SG.ACC
 彼はそのハエを殺した。
- a-ii. Jis ne-nu-žudè to kareivio (*tą kareivj).
 彼.3M.SG.NOM NEG-PREF-殺す.PST.3 その 兵士.M.SG.GEN ACC
 彼はその兵士を殺さなかった。
- Jis ne-už-mušė tos musės (*tą mušę).
 彼.3M.SG.NOM NEG-PREF-殺す.PST.3 その ハエ.F.SG.GEN ACC
 彼はそのハエを殺さなかった。
- a-iii. Jis nu-žudè kareivių (per karą).
 彼.3M.SG.NOM PREF-殺す.PST.3 兵士.M.PL.GEN 戦争中に
 (戦争中に) 彼は (何人かの) 兵士たちを殺した。
- *Jis žudė kareivių (per karą).
 彼.3M.SG.NOM 殺す.PST.3 兵士.M.PL.GEN 戦争中に
 (戦争中に) 彼は (何人かの) 兵士たちを殺していた。
- Jis už-mušė musių (per pietus).
 彼.3M.SG.NOM PREF-殺す.PST.3 ハエ.F.PL.GEN 昼食中に
 (昼食中に) 彼は (何匹かの) ハエを (叩き) 殺した。
- *Jis mušė musių (per pietus).
 彼.3M.SG.NOM 叩く.PST.3 ハエ.F.PL.GEN 昼食中に
 (昼食中に) 彼は (何匹かの) ハエを叩いていた。

¹⁰ 例文に用いる略号は以下の通り：ACC accusative (対格); ADJ adjective (形容詞); ADV adverb (副詞); DAT dative (与格); F feminine (女性); FUT future (未来); GEN genitive (属格); INF infinitive (不定詞); INS instrumental (具格); LOC locative (位格); M masculine (男性); N neuter (中性); NEG negative (否定); NOM nominative (主格); PASS passive (受動態); PL plural (複数); PREF prefix (接頭辞); PRS present (現在); PST past (過去); PTCP participle (分詞); REFL reflexive (再帰); SG singular (単数). 例文中の記号[?], [??], [*]は、それぞれ、インフォーマントの判断による「不自然な文」, 「きわめて不自然な文」, 「非文法的な文」の区別を示す。また、括弧{ }は置換可能であることを示す。

なお、本稿で用いた例文は、特集のアンケート項目に従って、筆者とリトアニア人のネイティブスピーカーが作成したものであり、例文に付された番号は、基本的に共通のアンケート番号に対応する。よって、論述に対応しない例文も含まれているが、混乱を避けるため、論述の内容に関する例文については、説明の中で例文番号を明記して区別する。

- a-iv. **Kareivis** **žuvo.**
 兵士.M.SGNOM 死ぬ.PST.3
 兵士は死んだ。
- Musė** **nu-gaišo.**
 ハエ.F.SGNOM PREF-死ぬ.PST.3
 ハエは死んだ。
- a-v. ***Jis** **nu-žudė** **ta** **kareivį,**
 彼.3M.SGNOM PREF-殺す.PST.3 その 兵士.M.SGACC
bet **kareivis** **ne-žuvo.**
 だが 兵士.M.SGNOM NEG-死ぬ.PST.3
 彼はその兵士を殺したが、死ななかった。
- *Jis** **žudė** **ta** **kareivį,**
 彼.3M.SGNOM 殺す.PST.3 その 兵士.M.SGACC
bet **kareivis** **ne-žuvo.**
 だが 兵士.M.SGNOM NEG-死ぬ.PST.3
 彼はその兵士を殺したが、死ななかった。
- *Jis** **už-mušė** **ta** **mušę,**
 彼.3M.SGNOM PREF-叩く.PST.3 その ハエ.F.SGACC
bet **musė** **ne-nu-gaišo.**
 だが ハエ.F.SGNOM NEG- PREF-死ぬ.PST.3
 彼はそのハエを叩き殺したが、ハエは死ななかった。
- Jis** **mušė** **ta** **mušę,**
 彼.3M.SGNOM 叩く.PST.3 その ハエ.F.SGACC
bet **musė** **ne-nu-gaišo.**
 だが ハエ.F.SGNOM NEG- PREF-死ぬ.PST.3
 彼はそのハエを叩いていたが、ハエは死ななかった。

無接頭辞・非限界動詞 *laužti* “壊す” は、語彙的に対応する自動詞 *lūžti* “壊れる” をもつ他動詞である (例文(1b)). この *laužti* “壊す” は、動作が対象に変化を起こさないことを表すことができる (例文(1b-v)).

- (1) b-i. **Jis** **su-laužė** **ta** **kėdę.**
 彼.3M.SGNOM PREF-壊す.PST.3 その 椅子.F.SGACC
 彼はその椅子を壊した。

- b-ii. Jis **ne-su-laužė** tos kėdės (*tą kėdę).
 彼.3M.SGNOM NEG-PREF-壊す.PST.3 その 椅子.F.SG.GEN ACC
 彼はその椅子を壊さなかった。
- b-iii. Jis **su-laužė** kėdžiu (per muštynes).
 彼.3M.SGNOM PREF-壊す.PST.3 椅子.F.PL.GEN 殴り合いの間に
 (殴り合いの間に) 彼は (いくつかの) 椅子を壊した。
 *Jis **laužė** kėdžiu (per muštynes).
 彼.3M.SGNOM 壊す.PST.3 椅子.F.PL.GEN 殴り合いの間に
 (殴り合いの間に) 彼は (いくつかの) 椅子を壊していた。
- b-iv. Kėdė **su-lūžo.**
 椅子.F.SG.NOM PREF-壊れる.PST.3
 椅子は壊れた。
- b-v. *Jis **su-laužė** tą kėdę,
 彼.3M.SGNOM PREF-壊す.PST.3 その 椅子.F.SG.ACC
 bet kėdė ne-su-lūžo.
 だが 椅子.F.SG.NOM NEG-PREF-壊れる.PST.3
 彼はその椅子を壊したが、椅子は壊れなかった。
 Jis **laužė** tą kėdę,
 彼.3M.SGNOM 壊す.PST.3 その 椅子.F.SG.ACC
 bet kėdė ne-su-lūžo.
 だが 椅子.F.SG.NOM NEG-PREF-壊れる.PST.3
 彼はその椅子を壊していたが、椅子は壊れなかった。

無接頭辞・非限界動詞 šildyti “温める・暖める”もまた、語彙的に対応する自動詞 šilti “温まる・暖まる”をもつ他動詞である。この šildyti “温める・暖める”は、動作が対象に変化を起こさないことを表すことができる (例文(1c-v))。

- (1) c-i. Jis **pa-šildė** tą sriubą.
 彼.3M.SGNOM PREF-温める.PST.3 その スープ.F.SG.ACC
 彼はそのスープを温めた。
- c-ii. Jis **ne-pa-šildė** tos sriubos (*tą sriubą).
 彼.3M.SGNOM NEG-PREF-温める.PST.3 その スープ.F.SG.GEN ACC
 彼はそのスープを温めなかった。

c-iii.	Jis	pa-šildė	sriubos.
	彼.3M.SG.NOM	PREF-温める.PST.3	スープ.F.SG.GEN
	彼は(いくらかの) スープを温めた.		
	??Jis	šildė	sriubos.
	彼.3M.SG.NOM	温める.PST.3	スープ.F.SG.GEN
	彼は(いくらかの) スープを温めていた.		
c-iv.	Sriuba	su-šilo.	
	スープ.F.SG.NOM	PREF-温まる.PST.3	
	スープは温まった.		
c-v.	*Jis	pa-šildė	ta sriuba,
	彼.3M.SG.NOM	PREF-温める.PST.3	その スープ.F.SG.ACC
	bet sriuba	ne-su-šilo.	
	だが スープ.F.SG.NOM	NEG-PREF-温まる.PST.3	
	彼はそのスープを温めたが、スープは温まらなかった.		
	Jis	šildė	ta sriuba,
	彼.3M.SG.NOM	温める.PST.3	その スープ.F.SG.ACC
	bet sriuba	ne-su-šilo.	
	だが スープ.F.SG.NOM	NEG-PREF-温まる.PST.3	
	彼はそのスープを温めていたが、スープは温まらなかった.		

1.2. [1B 類：直接影響・無変化] の動詞

リトアニア語では、動作が対象に直接影響を及ぼすが、対象に変化を起こさないことを表す [1B 類] の動詞の場合は、対象に変化を起こすことを表す [1A 類] の場合とは異なり、主格対格型に加えて、前置詞等による表現も見られる。すなわち、リトアニア語に関しては、動作が対象に変化を起こすが否かが、[1 類] の動詞の格枠組みの違いに現れると言える (例文(2))。なお、意志性・意図性が格枠組みの違いにどう関わるかについては、より詳細な調査が必要であろうが、少なくとも、今回挙げられた例では、意志性・意図性が [1 類] の動詞の格枠組みに違いをもたらす要因とはなっていないようである (例文(2a-i), (2b), (2c))。また、[1A 類] の動詞とは異なり、[1B 類] の動詞は、語彙的に対応する自動詞をもたない。さらに、[1A 類] の多くの動詞と同様に、[1B 類] の動詞は、ふつう、無接頭辞・非限界動詞の場合に、動作が対象に変化を起こさないことを表すことができる (例文(2a-v))。

他動性の観点から、[1B 類] の動詞の特徴を、以下のようにまとめることができる：

- b. Ji {tyčia / netyčia} i-spyrė jam
 彼.3M.SGNOM 意志的に うっかり PREF-蹴る.PST.3 彼.3M.SG.DAT
 jį koja (*jo koja).
 ~へ 足.F.SG.ACC 彼の足.F.SG.ACC
 彼女は {意志的に/うっかり} 彼の足を蹴った。
- c. Jis {tyčia / netyčia} su-si-dūrė
 彼.3M.SGNOM 意志的に うっかり PREF-REFL-ぶつかる.PST.3
 su tuo žmogumi.
 ~と その 人.M.SG.INS
 彼は {意志的に/うっかり} その人にぶつかった (その人とぶつかり合った)。
- Jis {tyčia / netyčia} at-si-trenkė
 彼.3M.SGNOM 意志的に うっかり PREF-REFL-ぶつかる.PST.3
 jį tą žmogų.
 ~へ その 人.M.SG.ACC
 彼は {意志的に/うっかり} その人にぶつかった (ぶち当たった)。

2. [2類：知覚]の動詞

リトアニア語では、いわば知覚可能、すなわち、意志性の有無にかかわらず、知覚することができることを意味する[2A類]の動詞、matyti “見る、見える (see)”, girdėti “聞く、聞こえる (hear)”等の格枠組みは、[1A類]の動詞と同様に、主格対格型である。一方、いわば知覚意志、すなわち、知覚可能性の有無にかかわらず知覚の意志があることを意味する(実際に知覚できるか否かは含意しない)[2B類]の動詞では、žiūrėti “(意志的に)見る (look at)”は主格対格型であるが、žiūrėti jį (+対格)のように前置詞をとともなうこともある。また、klausyti “(意志的に)聞く、聴く (listen to)”は klausytisのように再帰接辞をとともなうことが多いが、再帰接辞の有無にかかわらず直接目的語は属格をとる。このように、リトアニア語の[2B類]の動詞の場合、動作の対象が前置詞句や斜格によって表される。角田(1991)の二項述語階層では、知覚可能であることを表す[2A類]は、既に映像や音を捕えている、という点で[2B類]よりも他動性の程度が高いものとみなされているが、リトアニア語に関しては、この指摘は実態に適っているとと言える。

2.1. [2A類：知覚可能]の動詞

知覚可能を意味する[2A類]の動詞における動作の対象は、[1A類：直接影響・変化]を表す原型的な他動詞の目的語(被動目的語 affected object)とは異なり、その行為を行う際には存在せず、行為の結果として生ずる目的語(達成目的語 effected object)である。リトアニア語では、[2A類]に分類される動詞、matyti “見る、見える”, girdėti “聞く、聞

こえる”, *rasti* “見つける”, *daryti* “作る” の格枠組みは主格対格型で, 基本的に, 知覚する主体である主語は主格, 知覚される対象である直接目的語は肯定文では対格, 否定文では属格をとる (例文(3a)~(3d)). [1A 類] と異なる重要な点は, リトアニア語では, [2A 類] の動詞の場合, さらに, 自発的表現として, 知覚する主体が与格, 知覚される対象が主語となり主格をとる格枠組みが一般的に見られることである. すなわち, 「~が見える», 「~が聞こえる」などの日本語の表現に相当するリトアニア語の表現では, 定形動詞の代わりに不定形が用いられたり, 再帰動詞 *matytis* “見える”, *girdėtis* “聞こえる” などが用いられたりする. このような場合, 知覚する主体は与格, 知覚される対象は肯定文では主格, 否定文では属格で表される (例文(3a-iv), (3b-iv)). なお, 筆者には, 「見える」・「聞こえる」を意味する動詞 (非再帰動詞) はやや特殊な他動詞であり, 獲得・生産を意味する動詞を「知覚」として同じ [2 類] に入れることが適切か, という点については, 検討の余地があるように思われる. ただし, *daryti* “作る” の場合も, その再帰動詞 *darytis* “なる” は自発的な表現として用いられ得るなど, 一定の共通点はあるようである (例文(3d-iv)).

他動性の観点から, [2A 類] の動詞の特徴を, 以下のようにまとめることができる:

- (i) 肯定文の直接目的語は対格をとる.
- (ii) 否定文の直接目的語, および, 対応する自動詞の否定文の主語は属格をとる.
- (iii) 不定量を表すために肯定文の直接目的語が属格をとる.
- (iv) 自動詞的な格枠組みをとる動詞が派生可能であり, なおかつ, それを用いた表現が一般的である.

- (3) a-i. *Aš* ***matau*** *ten* *kelis* *žmonės*.
私.1SG.NOM 見る.PRS.1SG そこに いくらかの人々.M.PL.ACC
あそこに人が数人見える (私はあそこに数人の人を見ている).
- a-ii. *Aš* ***ne-matau*** *ten* *žmonių* (**žmonės*).
私.1SG.NOM NEG-見る.PRS.1SG そこに 人々.M.PL.GEN ACC
あそこに人 (人々) が見えない (私はあそこに数人の人を見ていない).
- a-iii. *Aš* ***matau*** *ten* *žmonių*.
私.1SG.NOM 見る.PRS.1SG そこに 人々.M.PL.GEN
あそこに人が数人見える (私はあそこに数人の人を見ている).
- a-iv. *Ten* *man* ***matyti*** *keli* *žmonės*.
そこに 私.1SG.DAT 見る.INF いくらかの人々.M.PL.NOM
Ten *man* ***mato-si*** *keli* *žmonės*.
そこに 私.1SG.DAT 見る.PRS.3-REFL いくらかの人々.M.PL.NOM
あそこに人が数人見える (私にはあそこに数人の人が見える).

- Ten man **ne-matyti** žmonių (*žmonės).
 そこに 私.1SGDAT NEG-見る.INF 人々.M.PL.GEN NOM
- Ten man **ne-si-mato** žmonių (*žmonės).
 そこに 私.1SGDAT NEG-REFL 見る.PRS.3 人々.M.PL.GEN NOM
 あそこに人(人々)は見えない(私にはあそこに人が見えない).
- b-i. Aš **girdėjau** kažkieno šauksmą.
 私.1SGNOM 聞く.PST.1SG 誰かの 叫び声.M.SGACC
 誰かが叫んだのが聞こえた(私は誰かの叫び声を聞いた).
- Aš **girdėjau** kažką šaukiant.
 私.1SGNOM 聞く.PST.1SG 誰か.ACC 叫ぶ.ADV.PRS.PTCP
 誰かが叫んだのが聞こえた(私は誰かが叫ぶのを聞いた).
- Aš **girdėjau,** kaip kažkas šaukė.
 私.1SGNOM 聞く.PST.1SG いかに 誰か.NOM 叫ぶ.PST.3
 誰かが叫んだのが聞こえた(私は誰かがいかに叫んだかを聞いた).
- b-iv. Man **buvo girdėti** {kažkieno šauksmas
 私.1SGDAT be.PST.3 聞く.INF 誰かの 叫び声.M.SGNOM
 /kažkas šaukiant}.
 誰か.NOM 叫ぶ.ADV.PRS.PTCP
 誰かが叫んだのが聞こえた(私には誰かの叫び声が/誰かが叫ぶのが聞こえた).
- Man **girdėjo-si** {kažkieno šauksmas
 私.1SGDAT 聞く.PRS.3-REFL 誰かの 叫び声.M.SGNOM
 /kažkas šaukiant}.
 誰か.NOM 叫ぶ.ADV.PRS.PTCP
 誰かが叫んだのが聞こえた(私には誰かの叫び声が/誰かが叫ぶのが聞こえた).
- c-i. Jis **{rado / at-rado}** pamestą raktą.
 彼.3M.SGNOM 見つける/PREF-見つける.PST.3 なくした 鍵.M.SGACC
 彼はなくした鍵を見つけた.
- c-iv. **At-si-rado** (?rado-si) jo pamestas raktas
 PREF-見つける.PST.3 見つける.PST.3-REFL 彼の なくした 鍵.M.SGNOM
 彼のなくした鍵が見つかった.
- d-i. Jis **pa-darė** tą kėdę.
 彼.3M.SGNOM PREF-作る.PST.3 その 椅子.F.SGACC
 彼はその椅子(単数)を作った.

d-ii.	Jis	ne-pa-darè	tos	kèdès	(*tą kèdę).
	彼.3M.SGNOM	PREF-作る.PST.3	その	椅子.F.SGGEN	ACC
	彼はその椅子（単数）を作らなかった。				
d-iii.	Jis	pa-darè		kèdžių.	
	彼.3M.SGNOM	PREF-作る.PST.3		椅子.F.PL.GEN.	
	彼は（いくつかの）椅子を作った。				
	*Jis	darè		kèdžių.	
	彼.3M.SGNOM	作る.PST.3		椅子.F.PL.GEN	
	彼は（いくつかの）椅子を作っていた。				
d-iv.	Ta	kèdè	pa-si-darè	reikalingas	daiktas.
	その	椅子.F.SG.NOM	PREF-REFL-作る	必要な	もの.F.SG.NOM
	その椅子は必需品になった。				

2.2. [2B 類：知覚意志] の動詞

知覚意志を意味する [2B 類] の動詞における動作の対象は、知覚可能を意味する [2A 類] の動詞の場合とは異なり、主格対格型以外の格枠組みをとる（例文(3e), (3f)）。まず、*žiūrėti* “(意志的・意識的に) 見る (look at)” は主格対格型であるが、*žiūrėti į* (+対格) のように前置詞をとることもある。再帰動詞 *žiūrėtis* “(自分の (目的の) ために) 見る” は、ふつう前置詞をとらない *žiūrėtis į* (+対格) のように用いられ、前置詞をとらなわず主格対格型をとる場合は“探す、見てみる”といった意味を表す（例文(3e)）。また、*klausyti* “(意志的に・意識的に) 聞く、聴く (listen to)” の直接目的語は義務的に属格をとる。*klausytis* のように再帰接辞をとることも多いが、[2A 類] の動詞の場合とは異なり、その場合も、知覚する主体が主格主語であり、知覚される対象が属格で表され、格枠組みは非再帰動詞の場合と同様である（例文(3f)）。ただし、再帰動詞 *žiūrėtis*, *klausytis*, いずれも、動作の対象を主格主語として、いわゆる可能受動を表すこともあり、それぞれ“見られる”、“聞かれる”という意味をもつ（例文(3e-iv), (3f-iv)）。

他動性の観点から、[2B 類] の動詞の特徴を、以下のようにまとめることができる：

- (i) 肯定文の場合、主格対格型とそれ以外の型がある。
- (ii) 否定文の場合、主格対格型の動詞にのみ「否定の属格」が見られる。
- (iii) 「不定量の属格」が見られない。
- (iv) 語彙的に対応する自動詞をもたないが、自動詞的な格枠組みをとる表現がある。
(3 類以降の動詞もすべて語彙的に対応する自動詞をもたないので、この点については言及しない)

- (3) e-i. Jis (tyčia) **pa-žiūrėjo** {tą namą / į tą namą}.
 彼.3M.SGNOM 意志的に PREF-見る.PST.3 その家.F.SGACC / ~へ その家.F.SGACC
 彼は(意志的・意識的に)その家を見た。
- Jis **pa-si-žiūrėjo** {tą namą / į tą namą}.
 彼.3M.SGNOM PREF-REFL-見る.PST.3 その家.F.SGACC / ~へ その家.F.SGACC
 彼はその家を見た(自分の(目的の)ためを見た)。
- e-ii. Jis **ne-pa-žiūrėjo** {to namo / *tą namą / į tą namą}.
 彼.3M.SGNOM NEG-PREF-見る.PST.3 その家.F.SG.GEN / ACC / ~へ その家.F.SGACC
 彼はその家を見なかった。
- Jis **ne-pa-si-žiūrėjo** {to namo / *tą namą / į tą namą}.
 彼.3M.SGNOM NEG-PREF-REFL-見る.PST.3 その家.F.SG.GEN / ACC / ~へ その家.F.SGACC
 彼はその家を見なかった(自分の(目的の)ために見なかった)。
- e-iii. *Jis **pa-žiūrėjo** namų.
 彼.3M.SGNOM PREF-見る.PST.3 家.F.PL.GEN
 彼は(いくつかの)家を見た。
- ?Jis **pa-si-žiūrėjo** namų.
 彼.3M.SGNOM PREF-REFL-見る.PST.3 家.F.PL.GEN
 彼は(いくつかの)家を見た(自分の(目的の)ためを見た)。
- e-iv. Tas **filmas lengvai žiūrėjo-si.**
 その 映画.M.SGNOM 簡単に 見る.PST.3-REFL
 その映画は簡単に見られた(見ることができた)。
- f-i. Jis (tyčia) **{klausė / pa-klausė / klausė-si / pa-si-klausė}**
 彼.3M.SGNOM 意志的に 聞く/PREF-聞く.PST.3/聞く.PST.3-REFL/PREF-REFL-聞く.PST.3
 to garso (*tą garsą).
 その 音.M.SG.GEN ACC
 彼は意識的にその音を聞いた。
- f-iv. Tas **įrašas lengvai klausė-si.**
 その 録音.M.SGNOM 簡単に 聞く.PST.3-REFL
 その録音は簡単に聞かれた(聞くことができた)。

3. [3類：追及]の動詞

リトアニア語では、[3類]に含まれる「追及」の動詞 *laukti* “待つ” や *ieškoti* “探す” は、主格属格型の格枠組みを取る。直接目的語を表す属格を対格に置き換えると非文になる(例文(5a-i), (5c))。

他動性の観点から、[3類]の動詞の特徴を、以下のようにまとめることができる：

- (i) 肯定文の直接目的語は属格をとる.
- (ii) 「否定の属格」は確認できない.
- (iii) 「不定量の属格」は確認できない.

- (5) a-i. Jis **laukia** autobuso (*autobusą).
 彼.3M.SGNOM 待つ.PRS.3 バス.M.SGGEN ACC
 彼はバスを待っている.
- a-ii. Jis **ne-laukia** autobuso.
 彼.3M.SGNOM NEG-待つ.PRS.3 バス.M.SGGEN
 彼はバスを待っていない.
- a-iii. ??Jis **laukia** autobusų.
 彼.3M.SGNOM 待つ.PRS.3 バス.M.PL.GEN
 彼はバスを待っている.
- b. Aš **laukiau** jo {ateinant / atvykstant}.
 私.1SGNOM 待つ.PST.1SG 彼.3M.SGGEN 来る.ADV.PRS.PTCP
 私は彼が来るのを待っていた.
- Aš **laukiau,** kol jis ateis.
 私.1SGNOM 待つ.PST.1SG ~間 彼.3M.SGNOM 来る.FUT.3
 私は彼が来るのを待っていた (彼が来る間待っていた).
- c. Jis **ieško** pinigėnės (*piniginę).
 彼.3M.SGNOM 探す.PRS.3 財布.M.SGGEN ACC
 彼は財布を探している.

4. [4 類: 知識] の動詞

リトアニア語では、「知る」と「分かる」に明確な区別がある。まず、「知識」を意味する「知る」については, žinoti “(読んだり聞いたりして) 知識として知っている” や išmanyti “よく知っている, 精通している” (例文(6a)), pažinti “(実際に見て) 外見をもとに知っている, 見知っている” (例文(6b)) 等のいくつかの動詞の使い分けがある。いずれも主格対格型である。žinoti “(読んだり聞いたりして) 知識として知っている” に関しては, žinoti apie (+対格) “~について知っている” のように前置詞をともなった表現 (例文(6a-i)) や, žinomas 「~に (与格) ~が (主格) 知られている」 のような格枠組みをとることもある (例文(6a-iv)).

「理解」を意味する「分かる」については, やはり主格対格型の suprasti “分かる, 理解する” が広く用いられる (例文(6c)). ただし, 第7節で後述するように, 「~語が分かる」という意味では, 「~語」を表す名詞が直接目的語として対格をとる場合と, 「~語で」を

意味する副詞が添えられる場合がある (例文(6c-i)). 後者は, 「～語を読む」, 「～語を書く」, 「～語を話す」といった表現にも一般的に用いられる.

「記憶」を意味する「覚える」, 「忘れる」は, いずれも主格対格型である (例文(7)). *prisiminti apie* (+対格) “～について覚えている” (例文(7a)), *pamiršti apie* (+対格) “～について忘れる” (例文(7b)) のように前置詞をともなった表現もある.

他動性の観点から, [4類]の動詞の特徴を, 以下のようにまとめることができる:

- (i) 肯定文の場合, 主格対格型とそれ以外の型がある.
- (ii) 否定文の場合, 主格対格型の動詞のみ「否定の属格」が見られる.
- (iii) 「不定量の属格」が見られない.

(6) a-i.	Jis	gerai	žino	tą	dalyką.
	彼.3M.SGNOM	よく	知っている.PRS.3	その	こと.M.SGACC
	彼はそのことをよく知っている.				
	Jis	gerai	išmano	tą	dalyką.
	彼.3M.SGNOM	よく	知っている.PRS.3	その	こと.M.SGACC
	彼はそのことをよく知っている (精通している).				
	Jis	viską	žino	apie	tą dalyką.
	彼.3M.SGNOM	すべて.ACC	知っている.PRS.3	～について	その こと.M.SGACC
	彼はそのことについてすべてを知っている.				
a-ii.	Jis	ne-žino	to	dalyko.	
	彼.3M.SGNOM	NEG-知っている.PRS.3	その	こと.M.SGGEN	
	彼はそのことを知らない.				
	Jis	ne-išmano	to	dalyko.	
	彼.3M.SGNOM	NEG-知っている.PRS.3	その	こと.M.SGGEN	
	彼はそのことを知らない (精通していない).				
	Jis	ne-žino	apie	tą	dalyką.
	彼.3M.SGNOM	NEG-知っている.PRS.3	～について	その	こと.M.SGACC
	彼はそのことについて知らない.				
a-iii.	*Jis	gerai	žino	įvairių	dalykų.
	彼.3M.SGNOM	よく	知っている.PRS.3	いろいろな	こと.M.PL.GEN
	彼はいろいろなことをよく知っている.				
	*Jis	gerai	išmano	įvairių	dalykų.
	彼.3M.SGNOM	よく	知っている.PRS.3	いろいろな	こと.M.PL.GEN
	彼はいろいろなことをよく知っている (精通している).				

- a-iv. Jam gerai žinomas tas dalykas.
 彼.3M.SG.DAT よく 知っている.PASS.PRS.PTCP.M.SG.NOM その こと.M.SG.NOM
 彼はそのことをよく知っている (彼にはそのことがよく知られている).
 Jam ne-žinomi įvairūs dalykai.
 彼.3M.SG.DAT NEG-知っている.PASS.PRS.PTCP.M.PL.NOM いろいろな こと.M.PL.NOM
 彼はいろいろなことを知らない (彼にはいろいろなことが知られていない).
- b-i. Aš pažįstu tą žmogų.
 私.1SG.NOM 知っている.PRS.1SG その 人.M.SG.ACC
 私はあの人を知っている (私たちはすでに知り合いになっている).
 Aš žinau tą žmogų.
 私.1SG.NOM 知っている.PRS.1SG その 人.M.SG.ACC
 私はあの人を知っている (彼についていろいろ聞いた・読んだ).
- b-ii. Aš ne-pažįstu to žmogaus (*tą žmogų).
 私.1SG.NOM 知っている.PRS.1SG その 人.M.SG.GEN ACC
 Aš ne-žinau to žmogaus (*tą žmogų).
 私.1SG.NOM 知っている.PRS.1SG その 人.M.SG.GEN ACC
 私はあの人を知らない.
- b-iii. *Aš pažįstu žmonių.
 私.1SG.NOM 知っている.PRS.1SG 人.M.PL.GEN
 *Aš žinau žmonių.
 私.1SG.NOM 知っている.PRS.1SG 人.M.PL.GEN
 私は (数人の) 人を知っている.
- b-iv. Tas žmogus man žinomas.
 その 人.M.SG.NOM 私.1SG.DAT 知っている.PASS.PRS.PTCP.M.SG.NOM
 私はその人を知っている (その人は私に知られている).
- c-i. Jis supranta tą dalyką.
 彼.3M.SG.NOM 分かる.PRS.3 その こと.M.SG.ACC
 彼はそのことを分かっている.
 Jis supranta rusų ir lietuvių kalbas.
 彼.3M.SG.NOM 分かる.PRS.3 ロシア人 と リトアニア人.M.PL.GEN 言語.M.PL.ACC
 Jis supranta rusiškai ir lietuviškai.
 彼.3M.SG.NOM 分かる.PRS.3 ロシア語で と リトアニア語で
 彼はロシア語とリトアニア語がわかる.

- c-ii. Jis **ne-supranta** to dalyko.
 彼.3M.SG.NOM NEG-分かる.PRS.3 その こと.M.SG.GEN
 Jis **ne-supranta** rusų ir lietuvių kalbų.
 彼.3M.SG.NOM NEG-分かる.PRS.3 ロシア人 と リトアニア人.M.PL.GEN 言語.M.PL.GEN
 彼にはロシア語とリトアニア語がわからない。
- c-iii. *Jis **supranta** žmonių / įvairių dalykų.
 彼.3M.SG.NOM 分かる.PRS.3 人々.M.PL.GEN いろいろなこと.M.PL.GEN
 彼は（数人の）人／いろいろなことを分かっている。
 *Jis **supranta** kalbų.
 彼.3M.SG.NOM 分かる.PRS.3 言語.F.PL.GEN
 彼は（いくつかの）言語がわかる。
- c-iv. ?Jam **suprantamas** tas dalykas.
 彼.3M.SG.DAT 分かる.PASS.PRS.PTCP.M.SG.NOM その こと.M.SG.NOM
 彼はそのことを分かっている（彼にはそのことが理解されている）。
 ??Jam **suprantamos** rusų ir lietuvių kalbos.
 彼.3M.SG.DAT 分かる.PASS.PRS.PTCP.F.PL.NOM ロシア人とリトアニア人.M.PL.GEN 言語.M.PL.GEN
 彼はロシア語とリトアニア語がわかる（彼には～語が理解されている）。
- (7) a-i. Ar jūs **prisimenate** mano žodžius?
 ～か あなた.2PL.NOM 覚えている.PRS.2PL 私の 言葉.M.PL.ACC
 あなたは私の言葉を覚えていますか？
 Ar jūs **prisimenate** apie tą įvykį?
 ～か あなた.2PL.NOM 覚えている.PRS.2PL ～について その 出来事.M.SG.ACC
 あなたはその出来事（事件）について覚えていますか？
 Ar jūs **prisimenate** (tai), ką sakiau vakar?
 ～か あなた.2PL.NOM 覚えている.PRS.2PL ～こと.ACC 言う.PRS.1SG 昨日
 あなたは昨日私が行ったことを覚えていますか？
- a-ii. Ar jūs **ne-prisimenate** mano žodžių (*žodžius)?
 ～か あなた.2PL.NOM NEG-覚えている.PRS.2PL 私の 言葉.M.PL.GEN ACC
 あなたは私の言葉を覚えていませんか？
- a-iii. *Ar jūs **ne-prisimenate** mano žodžių?
 ～か あなた.2PL.NOM NEG-覚えている.PRS.2PL 私の 言葉.M.PL.GEN
 あなたは（いくつかの）私の言葉を覚えていませんか？
- b. Aš **pamiršau** jo telefono numerį.
 私.1SG.NOM 忘れる.PST.1SG 彼の 電話.M.SG.GEN 番号.M.SG.ACC
 私は彼の電話番号を忘れてしまった。

5. [5 類：感情] の動詞

ここでは、「感情」の動詞を、「好き嫌い」、「欲求」、「喜怒哀楽」の3つに分類し、それぞれのリトアニア語における格枠組みについてまとめておく。

まず、リトアニア語の「好き嫌い」の表現には、日本語と同様に、「～を好む」、「～を愛する」のような主格対格型と、「～には～が気に入っている」のような対象を主格主語として感情主体を与格にする表現がある。これらの動詞は、「好き嫌い」の対象によって使い分けられる。*mylėti* “愛する”は主として生物（とくに人）への強い愛情を表す動詞で主格対格型（例文(8a)）、*mėgti* “好む”は主として無生物に対する嗜好を表す動詞でやはり主格対格型である（例文(8b)）。それに対して、*patikti* “好きだ、気に入っている”は生物・無生物いずれに対する「好き嫌い」も自然に表し得る動詞であり、感情の主体である意味上の主語は与格、感情の対象は主格という格枠組みを義務的にとる（例文(8c)）。この *patikti* は、「好き嫌い」を表す動詞の中では、おそらく日常会話において最も広く頻繁に用いられる動詞であり、動詞の不定形をともなって、「～は～するのが好きだ」という表現も一般的である。

次に、リトアニア語の「欲求」を表す動詞には、*norėti* “～を欲しがっている”（例文(9a)）、*reikalauti* “～を必要としている”（例文(9b)）のように、欲求している主体が主格で示されるものと、あるいは、*reikėti* “～には～が必要だ”のように、必要とする主体（いわゆる「意味上の主語」）が与格で示されるものがある（例文(9c)）。何かを欲求・必要としている主体が主格をとる場合の方が、与格をとる場合よりも、主体が事態に積極的に関与しているというニュアンスが強い。いずれの場合も、必要とされる対象は義務的に属格で表される。また、形容詞 *reikalingas* “必要な”もしばしば用いられる。この形容詞の場合は必要とする主体はやはり与格となるが、必要とされる対象が主格で表される（例文(9d)）。

また、リトアニア語では、「喜怒哀楽」を表す動詞は、*džiaugtis*（＋具格）“喜ぶ”、*pykti ant*（＋属格）“怒る”、*bijoti*（＋属格）“恐れる、怖がる”、*liūdėti*（＋属格）“悲しむ、嘆く”、*mėgautis*（＋具格）“楽しむ”のように、基本的に、斜格や前置詞をともなうなど、主格対格型以外の格枠組みをとる。また、文意をほとんど変えることなく形容詞や分詞に置換し得る場合が多いことも、このタイプの動詞の特徴である。述語となる形容詞や分詞は、*jis piktas ant*（＋属格）“彼は怒っている”（男性単数）のように感情主体の主語（主格）に対して性・数の一致をする場合（例文(10a)）と、*jam baisu* “彼（に）は恐ろしい”のように感情主体の主語（与格）に対して一致せず中性形で表される場合（例文(10b)）がある。述語となる形容詞や分詞は、一時的な感情表現のためには中性形が一般的に用いられるのに対して、主語（主格）に性・数の一致をする場合は、*jis yra piktas* “彼は怒りっぽい、意地悪だ”のように性格を形容することが多い（例文(10c)）。

他動性の観点から、[5 類] の動詞の特徴を、以下のようにまとめることができる：

- (i) 肯定文の場合、主格対格型とそれ以外の型がある。
 (ii) 否定文の場合、主格対格型の動詞のみ「否定の属格」が見られる。
 (iii) 「不定量の属格」が見られない（あるいは確認できない）。

- (8) a-i. **Motina stipriai mylėjo savo vaikus.**
 母親.F.SGNOM 強く 愛する.PST.3 自分の 子ども.M.PL.ACC
 母は子どもたちを深く（強く）愛していた。
Aš myliu tą žmogų.
 私.ISGNOM 愛する.PRS.1SG その 人.M.SGACC
 私はあの人を愛している。
- a-ii. **Motina ne-mylėjo savo vaikų (*vaikus).**
 母親.F.SGNOM NEG-愛する.PST.3 自分の 子ども.M.PL.GEN ACC
 母は子どもたちを愛していなかった。
Aš ne-myliu to žmogaus (*tą žmogų).
 私.ISGNOM NEG-愛する.PRS.1SG その 人.M.SGGEN ACC
 私はあの人を愛していない。
- a-iii. ***Motina mylėjo vaikų.**
 母親.F.SGNOM 愛する.PST.3 子ども.M.PL.GEN
 母は（何人かの）子どもたちを愛していた。
***Aš myliu žmonių.**
 私.ISGNOM 愛する.PRS.1SG 人々.M.PL.GEN
 私は（何人かの）人々を愛している。
- b-i. **Aš mėgstu bananus.**
 私.ISGNOM 好む.PRS.1SG バナナ.M.PL.ACC
 私はバナナが好きだ（私はバナナを好む）。
- b-ii. **Aš ne-mėgstu bananų (*bananus).**
 私.ISGNOM NEG-好む.PRS.1SG バナナ.M.PL.GEN ACC
 私はバナナが嫌いだ（私はバナナを好まない）。
- b-iii. ***Aš mėgstu bananų.**
 私.ISGNOM 好む.PRS.1SG バナナ.M.PL.GEN
 私は（いくらかの）バナナが好きだ（私は（いくらかの）バナナを好む）。
- c-i. **Man patinka bananai.**
 私.ISGDAT 気に入っている.PRS.3 バナナ.M.PL.NOM
 私はバナナが好きだ（私にはバナナが気に入っている）。

- Man **patinka** tas žmogus.
私.1SGDAT 気に入っている.PRS.3 その 人.M.SGNOM
私はあの人が好きだ (私にはあの人が気に入っている).
- c-ii. Man **ne-patinka** bananai.
私.1SGDAT NEG-気に入っている.PRS.3 バナナ.M.PL.NOM
私はバナナが嫌いだ (私にはバナナが気に入っていない).
- Man **ne-patinka** tas žmogus.
私.1SGDAT NEG-気に入っている.PRS.3 その 人.M.SGNOM
私はあの人が嫌いだ (私にはあの人が気に入っていない).
- (9) a. Aš **noriu** tą batų.
私.1SGNOM 欲しい.PRS.1SG あの 靴.M.PL.GEN
私はあの靴が欲しい.
- b. Dabar jis **reikalauja** pinigų.
今 彼.3SGDAT 要る.PRS.3 お金.M.PL.GEN
今、彼にはお金が要る (彼はお金を要している・要求している).
- c. Dabar jam **reikia** pinigų.
今 彼.3SGDAT 要る.PRS.3 お金.M.PL.GEN
今、彼にはお金が要る.
- d. Dabar jam **reikalingi** pinigai.
今 彼.3SGDAT 必要だ.ADJ.M.PL.NOM お金.M.PL.NOM
今、彼にはお金が要る (必要だ・必要なものだ).
- (10) a. Mama **{pyksta / [yra] pikta}**
母.F.SGNOM 怒っている.PRS.3 / be.PRS.3 怒った.ADJ.F.SGNOM
ant mano brolio dėl melo.
～に 私の 兄(弟) .M.SGGEN ～のために うそ.M.SGGEN
母は私の弟のうそに怒っている (うそのために私の弟に対して怒っている).
- Mama **{pyksta / [yra] pikta}**
母.F.SGNOM 怒っている.PRS.3 / be.PRS.3 怒った.ADJ.F.SGNOM
ant mano brolio dėl to, kad mano brolis melavo.
～に 私の 弟.M.SGGEN ～ことのために 私の 弟.M.SGNOM うそつく.PST.3
母は私の弟のうそに怒っている (私の弟がうそをついたのに怒っている).
- b. Jis **bijo** šunų.
彼.3M.SGNOM 恐れる.PRS.3 犬.M.PL.GEN
彼は犬が怖い.

	Jam		baisu.	
	彼.3SGDAT		恐ろしい.ADJ.N	
	彼には恐ろしい.			
c.	Mama	[yra]	labai	pikta.
	母.F.SGNOM	be.PRS.3	とても	怒った.ADJ.F.SGNOM
	母はとても怒りっぽい (人だ).			
	Jis	[yra]	labai	baisus.
	彼.3M.SGNOM	be.PRS.3	とても	恐ろしい.ADJ.M.SGNOM
	彼はとても恐ろしい (人だ).			

6. [6 類 : 関係] の動詞

角田 (1991) によって「関係」の動詞に分類される動詞に相当するリトアニア語の表現には、動詞のみならず、「似る」のように形容詞や分詞によって表されるものも多い。主格対格型の状態動詞として挙げられるのは、所有動詞「持つ」の他、「含む」、「合う、対応する」などである (例文(11))。だが、*būti* が連辞動詞「～である」として機能する場合 (主格主格) を始め、他の状態動詞の多くは、「成る」(主格具格)、「欠ける、不足する」(与格属格) など、他動詞的な主格対格型ではない格枠組みをとる (例文(12))。なお、所有動詞の直接目的語、および、*būti* が存在動詞「ある・いる」として機能する場合の主語に限っては、「不定量の属格」が観察される (例文(11b-iii))。

なお、リトアニア語では、連辞動詞として機能する *būti* を用いた「～は～である」という表現では、一般的に、補語の名詞類が主格で表される。*būti* の過去形および未来形を用いた「～は～であった」、「～は～であろう」(未来は日本語の「～は～になるだろう」という表現にも相当する) といった場合も、補語は主格で表される。ただし、一時的・短期的な状態を表す場合に限っては、義務的ではないが、補語の名詞は具格でもあり得る。恒常的・長期的な状態を表す場合は、補語は義務的に主格で表される (例文(12a))。一方、文字通り「～になる」という意味を表す動詞 *tapti* の場合、補語は義務的に具格であり、主格などの他の格に置換すると非文となる (例文(12b))。また、「～は～として働いている」という表現でも、具格は義務的に用いられる (例文(12c))。

他動性の観点から、[6 類] の動詞の特徴を、以下のようにまとめることができる：

- (i) 肯定文の場合、主格対格型とそれ以外の型がある。
- (ii) 否定文の場合、主格対格型の動詞の直接目的語に「否定の属格」が観察される。
- (iii) 所有動詞の直接目的語に「不定量の属格」が見られる。

- (11) a-i. Jis [yra] panašus i tėvą.
 彼.3M.SG.NOM be.PRS.3 似た.ADJ.M.SG.NOM ~へ 父親.M.SG.ACC
 彼は父親に似ている。
- Jis primena tėvą.
 彼.3M.SG.NOM 想起させる.PRS.3 父親.M.SG.ACC
 彼は父親に似ている (父親を想起させる)。
- Jis turi tėvą.
 彼.3M.SG.NOM もつ.PRS.3 父親.M.SG.ACC
 彼は父親がいる (父親をもっている)。
- a-ii. Jis ne-panašus i tėvą.
 彼.3M.SG.NOM NEG-似た.ADJ.M.SG.NOM ~へ 父親.M.SG.ACC
 彼は父親に似ていない。
- Jis ne-primena tėvo.
 彼.3M.SG.NOM NEG-想起させる.PRS.3 父親.M.SG.GEN
 彼は父親を想起させない。
- Jis ne-turi tėvo.
 彼.3M.SG.NOM NEG-もつ.PRS.3 父親.M.SG.GEN
 彼は父親がいない (父親をもっていない)。
- a-iii. Jis turi pinigų.
 彼.3M.SG.NOM もつ.PRS.3 お金.M.PL.GEN
 彼はお金がある (お金をもっている)。
- b-i. Jūros vanduo [yra] druskingas.
 海.M.SG.GEN 水.M.SG.NOM be.PRS.3 塩っぽい.ADJ.M.SG.NOM
 海水は塩分を含んでいる (塩っぽい)。
- b-ii. Ežero vanduo nėra druskingas.
 湖.M.SG.GEN 水.M.SG.NOM NEGbe.PRS.3 塩っぽい.ADJ.M.SG.NOM
 湖水は塩分を含んでいない (塩っぽくない)。
- b-iii. Jūros vanduo turi druskos (*druską).
 海.M.SG.GEN 水.M.SG.NOM もつ.PRS.3 塩.F.SG.GEN ACC
 海水は (いくらかの) 塩分を含んでいる ((いくらかの) 塩をもっている)。
- c-i. Ta spalva atitinka jo skonį.
 その 色.F.SG.NOM 合う.PRS.3 彼の 趣味.M.SG.ACC
 その色は彼の趣味に合う。

- c-ii. Ta spalva **ne-atitinka** jo skonio.
 その 色.F.SGNOM NEG-合う.PRS.3 彼の 趣味.M.SG.GEN
 その色は彼の趣味に合わない.
- (12) a. Mano brolis **[yra]** gydytojas (*gydytoju).
 私の 弟.M.SGNOM be.PRS.3 医者.M.SGNOM INS
 私の弟は医者だ (常に医者だ・職業が医者だ).
 Mano brolis ilgai **buvo** gydytojas (*gydytoju).
 私の 弟.M.SGNOM 長いこと be.PST.3 医者.M.SGNOM INS
 私の弟は長いこと医者だった.
 Mano brolis laikinai **buvo** gydytoju (gydytojas).
 私の 弟.M.SGNOM 一時的に be.PST.3 医者.M.SGINS NOM
 私の弟は一時的に医者だった.
 Mano brolis **bus** gydytojas (??gydytoju).
 私の 弟.M.SGNOM be.FUT.3 医者.M.SGNOM INS
 私の弟は医者になるだろう.
 Mano brolis laikinai **bus** gydytoju (gydytojas).
 私の 弟.M.SGNOM 一時的に be.FUT.3 医者.M.SGINS NOM
 私の弟は一時的に医者になるだろう.
- b. Mano brolis **taps / tapo** gydytoju (*gydytojas).
 私の 弟.M.SGNOM なる.FUT.3 / PST.3 医者.M.SGINS NOM
 私の弟は医者になるだろう / なった.
- c. Mano brolis **dirba** gydytoju (*gydytoja).
 私の 弟.M.SGNOM 働く.PRS.3 医者.M.SGINS NOM
 私の弟は医者だ (医者として働いている).
- d. Jam **trūksta** pinigų.
 彼.3SG.DAT 不足する.PRS.3 お金.M.PL.GEN
 彼にはお金が不足している (欠けている).

7. [7類：能力]の動詞

リトアニア語の可能表現においては、いくつかの可能動詞の使い分けがある。可能動詞 *galėti* は主に「今～できる」のような条件可能、*mokėti* は「～する能力がある」という能力可能の表現に用いられる (例文(13), (14))。可能動詞の後に添えられた動詞の不定形の直接目的語は、それらの動詞の要求する格をとる。たとえば、「車を運転できる」ならば、肯定文では直接目的語である「車」は対格をとり、否定文ならば属格をとる。なお、リトアニア語では可能動詞をとまなわない「車を運転する」、「～語を話す」という表現によって

能力可能を意味することもあり、そのような場合は、直接目的語はそれらの動詞の要求する格をとる。なお、「運転」や「水泳」のような動作性名詞を可能動詞の直接目的語として、「運転ができる」、「水泳ができる」のように可能表現をおこなうことは一般的にはできず、「運転する」、「水泳する」などを意味する動詞の不定形を可能動詞に添えて相当の意味を表す。動作性名詞を用いる場合、状況可能・能力可能いずれも表し得る無人称動詞 *sektis* “上手くいく、調子よくいく”によって、「～には運転が上手くいっている」のような表現（動作主体である意味上の主語は与格をとる）がある程度可能である。

なお、リトアニア語では、「話す」、「走る」のように、人が生得的に備えている自然な能力と、「運転する」、「泳ぐ」のように、習得のために特別な練習・訓練を要し努力しなくてはならない能力の違いが、可能表現によって明確に区別されることはない（例文(14)）。ただし、「ロシア語」、「リトアニア語」のような個別言語の場合、それを表す名詞（句）を *mokėti* “～できる、～する能力がある”の対格目的語として“～語ができる”，*sektis* “上手くいく、調子よくいく”の主格主語として“～語が上手い”のような表現が可能である（例文(13c)）のに対して、これらの表現を「言語、言葉」に置き換えて「彼は話が上手い」のように言うことはできない（例文(14a)）等、一般的な生得的な能力か、特別な習得的な能力か、という違いは様々な形で現れる。

他動性の観点から、〔7類〕の動詞の特徴を、以下のようにまとめることができる：

- (i) 肯定文の場合、主格対格型とそれ以外の型がある。
- (ii) 否定文の場合、主格対格型の動詞のみ「否定の属格」が見られる。
- (iii) 「不定量の属格」が見られない。

(13) a-i.	Jis	{gali / moka}	vairuoti	automobilį.	
	彼.3M.SGNOM	できる.PRS.3	運転する.INF	車.M.SGACC	
	彼は車の運転ができる（彼は車を運転することができる）。				
	Jis	vairuoja	automobilį.		
	彼.3M.SGNOM	運転する.PRS.3	車.M.SGACC		
	彼は車の運転ができる（彼は車を運転する）。				
	Jis	gali	vairuoti	automobilį	šiandien.
	彼.3M.SGNOM	できる.PRS.3	運転する.INF	車.M.SGACC	今日
	今日、彼は車の運転ができる（車を運転することが可能だ）。				
	Jis	gerai	moka	vairuoti	automobilį.
	彼.3M.SGNOM	よく	できる.PRS.3	運転する.INF	車.M.SGACC
	彼は車の運転が上手くできる（車を上手く運転する能力がある）。				

- Jam** **seka-si** **vairuoti** **automobilį.**
 彼.3M.SG.DAT 上手くいく.PRS.3-REFL 運転する.INF 車.M.SG.ACC
 彼は車の運転が上手くできる (彼には運転することが上手くいつている).
- Jam** **seka-si** **vairavimas.**
 彼.3M.SG.DAT 上手くいく.PRS.3-REFL 運転.M.SG.NOM
 彼は車の運転が上手くできる (彼には運転が上手くいつている).
- a-ii. **Jis** **{ne-gali / ne-moka}** **vairuoti** **automobilio**
 彼.3M.SG.NOM NEG-できる.PRS.3 運転する.INF 車.M.SG.GEN
 (*automobilį).
 車.M.SG.ACC
 彼は車の運転ができない (彼は車を運転することができない).
- Jis** **ne-vairuoja** **automobilio** **(*automobilį).**
 彼.3M.SG.NOM NEG-運転する.PRS.3 車.M.SG.GEN ACC
 彼は車の運転ができない (彼は車を運転しない).
- Jam** **ne-si-seka** **vairuoti** **automobilį.**
 彼.3M.SG.DAT NEG-REFL-上手くいく.PRS.3 運転する.INF 車.M.SG.ACC
 彼は車の運転が上手くない (彼には運転することが上手くいつていない).
- Jam** **ne-si-seka** **vairavimas.**
 彼.3M.SG.DAT NEG-REFL-上手くいく.PRS.3 運転.M.SG.NOM
 彼は車の運転が上手くない (彼には運転が上手くいつていない).
- b. **Jis** **{gali / moka}** **plaukti (plaukioti).**
 彼.3M.SG.NOM できる.PRS.3 泳ぐ.INF
 彼は泳げる.
- Jam** **seka-si** **plaukti (plaukioti).**
 彼.3M.SG.DAT 上手くいく.PRS.3-REFL 泳ぐ.INF
 彼は泳ぐのが上手い (彼には泳ぐことが上手くいつている).
- Jam** **seka-si** **plaukimas (plaukiojimas).**
 彼.3M.SG.DAT 上手くいく.PRS.3-REFL 泳ぎ (水泳) .M.SG.NOM
 彼は泳ぐのが上手い (彼には泳ぎが上手くいつている).
- c. **Jis** **moka** **rusiškai.**
 彼.3M.SG.NOM できる.PRS.3 ロシア語で.ADV
 彼はロシア語ができる (彼はロシア語でできる).
- Jis** **moka** **rusų** **kalbą.**
 彼.3M.SG.NOM できる.PRS.3 ロシア人.M.PL.GEN 言語.F.SG.ACC
 彼はロシア語ができる (彼はロシア語をできる).

- Jam **seka-si** rusu kalba.
 彼.3M.SGDAT 上手くいく.PRS.3-REFL ロシア人.M.PL.GEN 言語.F.SGNOM
 彼はロシア語が上手い (彼にはロシア語が上手くいっている).
- (14) a. Jis **moka** gerai kalbėti.
 彼.3M.SGNOM できる.PRS.3 よく 話す.INF
 彼は話をするのが上手だ (彼は上手く話すことができる).
- Jis gerai **kalba**.
 彼.3M.SGNOM よく 話す.PRS.3
 彼は話をするのが上手だ (彼は上手く話す).
- Jam gerai **seka-si** kalbėti.
 彼.3M.SGDAT よく 上手くいく.PRS.3-REFL 話す.INF
 彼は話をするのが上手だ (彼には話すことが上手くいっている).
- ??Jis gerai **moka** kalbą.
 彼.3M.SGNOM よく できる.PRS.3 言語.F.SGACC
 彼は話をするのが上手だ (彼は話を上手くできる).
- ??Jam **seka-si** kalba.
 彼.3M.SGDAT 上手くいく.PRS.3-REFL 言語.F.SGNOM
 彼は話をするのが上手だ (彼には話が上手くいっている).
- b. Jis {gali / moka} greitai bėgti (bėgioti).
 彼.3M.SGNOM できる.PRS.3 早く 走る.INF
 彼は早く走れる.
- Jam **seka-si** {bėgti / bėgimas}.
 彼.3M.SGDAT 上手くいく.PRS.3-REFL 走る.INF 走り.M.SGNOM
 彼は走るのが得意だ (彼には走ること／走りが上手くいっている).

8. 【移動】の動詞

リトアニア語の移動動詞は、基本的に自動詞的な特徴を多く備えており、一般的に「～へ行く・来る」のような移動の到着点は前置詞句、「～を(通って)行く」という場合の通路(通行場所)は具格によって表される(例文(15)). 一方、「～を渡る」、「～を通り過ぎる」、「～へ近づく」のような表現では、渡る対象、通過する対象、接近する対象を前置詞句で表す他、対格で表して他動詞的な格枠組みを取ることもある(例文(15b), (15d), (15e)). このような場合、否定文ではやはり対格に代わって属格をとる「否定の属格」が義務的である. なお、「歩いて行く」、「乗り物で行く」、「走って行く」といったリトアニア語の移動動詞においては、一般的に、接頭辞によって、移動の方向や様態の意味を表し分けられる. 以下に示す移動動詞の例は、eiti “歩いて行く”に接頭辞を付加した動詞に統一しておく.

- (15) a-i. Jis **at-ėjo** ĭ mokyklą.
 彼.3M.SGNOM 来る (PREF-行く) .PST.3 ~へ 学校.F.SGACC
 彼は (歩いて) 学校に着いた.
- a-ii. Jis **ne-at-ėjo** ĭ mokyklą.
 彼.3M.SGNOM NEG-来る (PREF-行く) .PST.3 ~へ 学校.F.SGACC
 彼は学校に着かなかった.
- b-i. Jis **per-ėjo** per gatvę.
 彼.3M.SGNOM 渡る (PREF-行く) .PST.3 ~を横切って 道.F.SGACC
 彼は道を渡った/横切った (道を横切って渡った).
 Jis **per-ėjo** gatvę.
 彼.3M.SGNOM 渡る (PREF-行く) .PST.3 道.F.SGACC
 彼は道を渡った/横切った.
- b-ii. Jis **ne-perėjo** per gatvę.
 彼.3M.SGNOM NEG-渡る (PREF-行く) .PST.3 ~を横切って 道.F.SGACC
 彼は道を渡らなかった (道を横切って渡らなかった).
 Jis **ne-perėjo** gatvės (*gatvę).
 彼.3M.SGNOM NEG-渡る (PREF-行く) .PST.3 道.F.SGGEN ACC
 彼は道を渡らなかった/横切らなかった.
- c-i. Jis **ėjo** ta gatve.
 彼.3M.SGNOM 行く .PST.3 あの 道.F.SGINS
 彼はあの道を通って行った (行くところだった).
 Jis **nu-ėjo** ta gatve.
 彼.3M.SGNOM PREF-行く .PST.3 あの 道.F.SGINS
 彼はあの道を通った.
- c-ii. Jis **nėjo** ta gatve (*tos gatvės).
 彼.3M.SGNOM NEG-行く .PST.3 あの 道.F.SGINS GEN
 彼はあの道を通っていた.
 Jis **ne-nu-ėjo** ta gatve (*tos gatvės).
 彼.3M.SGNOM NEG-PREF-行く .PST.3 あの 道.F.SGINS GEN
 彼はあの道を通った.
- d-i. Jis **pra-ėjo** pro tą namą.
 彼.3M.SGNOM 過ぎる (PREF-行く) .PST.3 ~を通して あの 家.F.SGACC
 彼はその家を通り過ぎた (通って過ぎた).

	Jis	pra-éjo	ta	nama.
	彼.3M.SGNOM	過ぎる (PREF-行く) .PST.3	あの	家.F.SGACC
	彼はその家を通り過ぎた。			
d-ii.	Jis	ne-pra-éjo	pro ta	nama.
	彼.3M.SGNOM	NEG-過ぎる (PREF-行く) .PST.3	～を通して あの	家.F.SGACC
	彼はその家を通り過ぎなかった (通って過ぎなかった)。			
	Jis	ne-pra-éjo	to	namo (*ta nama).
	彼.3M.SGNOM	NEG-過ぎる (PREF-行く) .PST.3	あの	家.F.SGGEN ACC
	彼はその家を通り過ぎなかった。			
e-i.	Jis	pri-éjo	prie	miško.
	彼.3M.SGNOM	近づく (PREF-行く) .PST.3	～の近くに	森.M.SGGEN
	彼は森に近づいた (森の近くに近づいた)。			
	Jis	pri-éjo	miška.	
	彼.3M.SGNOM	近づく (PREF-行く) .PST.3	森.M.SGACC	
	彼は森に近づいた。			
e-ii.	Jis	ne-pri-éjo	prie	miško.
	彼.3M.SGNOM	NEG-近づく (PREF-行く) .PST.3	～の近くに	森.M.SGGEN
	Jis	ne-pri-éjo	miško	(*miška).
	彼.3M.SGNOM	NEG-近づく (PREF-行く) .PST.3	森.M.SGGEN	ACC
	彼は森に近づかなかった。			

9. 「感覚」の動詞

リトアニア語では、「感覚」を表す動詞は、主格対格型の他動詞的な格枠組みをとらないことを特徴とする。「感覚」表現には、形容詞・分詞が広く用いられ、経験者主語は主格の他、与格をとることも多い。また、日本語の二重主語構文「～は～が痛い」のように、「全体」である経験者と「部分」である身体部分のいずれも項とする動詞がある (例文(16c))。とくに、感覚の経験者がその事態をコントロールできないような場合、感覚を表す述語は形容詞・分詞の中性形、意味上の主語 (経験者) は与格によって表される傾向にある (例文(17a), (17b))。「今日は寒い (日だ)」、「彼は冷たい (人間だ)」といった、客観的に形容する表現においては、形容詞は主格主語あるいは述語の性・数に一致する (例文(17c), (17d))。

(16) a-i.	Jis	{išalko / [yra] išalkęs}.
	彼.3M.SGNOM	空腹になる.PST.3 / be.PRS.3 空腹になる.ACT.PST.PTCP.M.SGNOM
	彼はお腹を空かしている (空腹になった / 空腹になっている)。	

- c. Jis [yra] šaltas.
 彼.3M.SGNOM be.PRS.3 空腹だ.ADJ.M.SGNOM
 彼は冷たい (人だ).
- d. Šiandien šalta diena.
 今日 寒い.ADJ.F.SGNOM 日.F.SGNOM
 今日は寒い (今日は寒い日だ).

10. [相互行為] の動詞

リトアニア語では、相互行為 *interaction* の動詞のうち、「助ける」を意味する動詞の場合、「助ける」相手が与格で表される (例文(18a)). 「～が～を～するのを助ける」というように別の動詞の不定形とその直接目的語をとまなう場合、その目的語は対格をとり得る (例文(18b-i)). 「～が～を～するのを助けなかった」のような否定文の場合は、「助ける」相手は与格のままだが、その対格目的語は義務的に「否定の属格」となる (例文(18b-ii)).

また、相互行為の中でも言語行動を表す動詞、「訊く、尋ねる」や「頼む、求める」を意味する動詞の格枠組みに注目すべきであろう。たとえば「私はその理由を彼に訊いた」という場合、訊かれる (尋ねられる) 相手である「彼」は対格あるいは属格、訊かれることである「その理由」は義務的に属格となる (例文(19a-i)). 否定文「私はその理由を彼に訊かなかった」という場合には、「彼」も「その理由」も属格となる (例文(19a-ii)). 「頼む、求める」の場合、たとえば「私は助けを彼に頼んだ」とすると、頼まれる相手である「彼」は対格、頼まれる内容である「助け」は属格となる (例文(19b-i)). 否定文「私は助けを彼に頼まなかった」という場合には、「彼」も「助け」も属格となる (例文(19b-ii)). この事実は、単に聞き手に対して情報を与えるだけの言語行動である「話す、語る」という意味の動詞では、たとえば「私はその話を彼に話した」という場合、聞き手である「彼」が与格、話した内容である「その話」は対格をとり、「与える」のような3項動詞と同じ格枠組みをとる (例文(19c)) ことと比較すると興味深い。おそらく、「訊く、尋ねる」や「頼む、求める」は、相手に何らかの形で直接影響を及ぼす (つまり、相手に反応を求め、相手は反応せざるを得ない) ため、相手を直接目的語すなわち対格とする他動詞的な格枠組みが現れるのではないか。他方、「訊く、尋ねる」や「頼む、求める」内容を表す名詞が属格をとるのは、「知覚」の動詞でも意志的・意識的に「聞く、聴く」を意味する動詞の目的語が属格をとること (2.2 節)、また、「追求」の動詞である「待つ」や「探す」の目的語が属格をとること (3 節)、おそらくかかわりがある。

- (18) a-i. Aš jam padėjau.
 私.1SGNOM 彼.3M.SGDAT 助ける.PST.1SG
 私は彼を 手伝った/助けた.

- a-ii. Aš jam (*jo) **ne-padėjau.**
 私.1SG.NOM 彼.3M.SG.DAT GEN NEG-助ける.PST.1SG
 私は彼を手伝わなかった／助けなかった。
- b-i. Aš jam **padėjau**
 私.1SG.NOM 彼.3M.SG.DAT 助ける.PST.1SG
nešti tą daiktą.
 運ぶ.INF その 物.M.SG.ACC
 私は彼がそれを運ぶのを手伝った。
- b-ii. Aš jam (*jo) **ne-padėjau**
 私.1SG.NOM 彼.3M.SG.DAT GEN NEG-助ける.PST.1SG
nešti to daikto (*tą daiktą).
 運ぶ.INF その 物.M.SG.ACC GEN
 私は彼がそれを運ぶのを手伝わなかった／助けなかった。
- (19) a-i. Aš **paklausiau** {jį / jo}, kodėl.
 私.1SG.NOM 訊く.PST.1SG 彼.3M.SG.ACC / GEN なぜ
 Aš **paklausiau** {jį / jo} priežasties (*priežastį).
 私.1SG.NOM 訊く.PST.1SG 彼.3M.SG.ACC / GEN 理由.F.SG.GEN ACC
 私はその理由を彼に訊いた。
- a-ii. Aš **ne-paklausiau** {*jį / jo}, kodėl.
 私.1SG.NOM NEG-訊く.PST.1SG 彼.3M.SG.ACC / GEN なぜ
 Aš **ne-paklausiau** {*jį / jo} priežasties (*priežastį).
 私.1SG.NOM NEG-訊く.PST.1SG 彼.3M.SG.ACC / GEN 理由.F.SG.GEN ACC
 私はその理由を彼に訊かなかった。
- b-i. Aš **prašau** jį pagalbos.
 私.1SG.NOM 頼む.PST.1SG 彼.3M.SG.ACC 助け.F.SG.GEN
 私は助けを彼に頼んだ。
- b-ii. Aš **ne-prašau** jo (*jį) pagalbos.
 私.1SG.NOM NEG-頼む.PST.1SG 彼.3M.SG.GEN ACC 助け.F.SG.GEN
 私は助けを彼に頼まなかった。
- c-i. Aš **papasakojau** jam apie tai.
 私.1SG.NOM 話す.PST.1SG 彼.3M.SG.DAT ~について そのこと
 私はそのことを（そのことについて）彼に話した。
 Aš **papasakojau** jam tą istoriją.
 私.1SG.NOM 話す.PST.1SG 彼.3M.SG.DAT その 話.F.SG.ACC
 私はその話を彼に話した。

c-ii. Aš	ne-papasakojau	jam	apie	tai.
私.1SG.NOM	NEG-話す.PST.1SG	彼.3M.SG.DAT	~について	そのこと
私はそのことを（そのことについて）彼に話さなかった。				
Aš	ne-papasakojau	jam	tos	istorijos.
私.1SG.NOM	NEG-話す.PST.1SG	彼.3M.SG.DAT	その	話.F.SG.GEN
私はその話を彼に話さなかった。				

11. [再帰] の動詞

すでに拙論（櫻井 2012, 2014a）でも指摘したように、リトアニア語の再帰動詞は、文字通りの再帰から、身体動作、相互 *reciprocal*、自己利益、自発、反使役、可能受動など多岐に渡るが、いわゆる中動の意味領域を中心においている。リトアニア語では、これらの意味を表すために、再帰動詞が義務的に用いられ、非再帰動詞と独立の再帰代名詞や副詞との組み合わせは用いられない。たとえば、「会う」という表現では、直訳すると「彼を会う」のように対象を対格で表す場合、非再帰動詞 *sutikti*、再帰動詞 *susitikti* のいずれも用いられ得るが、「彼と会う」のように「~とともに」を意味する前置詞 *su*（+具格）をとともなう場合、再帰動詞の使用が義務的である（例文(20a)）。ちなみに、同じ *sutikti* という非再帰動詞が「同意する、賛成する」という意味で用いられる場合は前置詞 *su*（+具格）と自然に共起する（例文(20b)）。

リトアニア語の再帰動詞の特徴は、反使役と可能受動以外は対格目的語をとり得ること、すなわち、完全に自動詞化していないことである。たとえば、「体を洗う」のように、主語自身の身体に対する動作（いわゆる見繕い）を表す場合、義務的に再帰動詞が用いられ、その身体部分是对格で示され得る（例文(21a)）。また、「買う」という表現では、主語自身以外の誰かのために買うことに言及する必要がなければ、リトアニア語では再帰動詞が用いられる。直訳すると「自分のために買う」という意味（いわゆる自己利益）をもつこのタイプの再帰動詞は、非再帰動詞と同様に対格をとり得る（例文(21b)）。

(20) a-i. Mes	su juo	su-si-tikome	(* sutikome).
私たち.1PL.NOM	~と 彼.3M.SG.INS	PREF-REFL-会う.PST.1PL	会う.PST.1PL
私は彼に会った（私たちは彼と出会った）。			
Aš	jį	(*su juo)	sutikau.
私.1SG.NOM	彼.3M.SG.ACC	~と 彼.3M.SG.INS	会う.PST.1SG
私は彼に会った。			
Aš	{jį / su juo}	su-si-tikau.	
私.1SG.NOM	彼.3M.SG.ACC ~と 彼.3M.SG.INS	PREF-REFL-会う.PST.1SG	
私は彼に会った（私は彼と出会った）。			

表 4: リトアニア語における二項述語の格枠組み (角田 (1991)を改変)¹¹

類	1		2		3	4	5	6	7
意味	直接影響		知覚		追求	知識	感情	関係	能力
下位類	1A	1B	2A	2B					
意味	変化	無変化							
例	殺す, 壊す, 温める	叩く, 蹴る, ぶつか る	see, hear, 見つけ る	look, listen	待つ, 捜す	知る, わかる, 覚える, 忘れる	愛す, 惚れる, 好き, 嫌い, 欲しい, 要る, 怒る, 恐れる	持つ, ある, 似る, 欠ける, 成る, 含む, 対応する	できる, 得意, 強い, 苦手, good, capable, proficient
リトア ニア語 の基本 的な格 枠組み	主+対	主+対 主+前	主+対 (与+主)	主+対 主+属 主+前	主+属	主+対 主+前 主+副	主+対 主+属 主+前 与+主 与+属	主+対 主+具 主+前 与+属 主+名 主+形	主+対 主+助動 +不定 +対 主+副 与+主

また、本稿で問題とした 5 点については、角田 (1991) で挙げられた語彙の動詞に関し
て検討した結果、以下のようなことが言える。

- (i) 肯定文の直接目的語が対格をとるか。
- ・ 1A 類の動詞は、主格対格型であり、義務的に対格をとる。
 - ・ 2A 類の動詞は、基本的には主格対格型である。だが、再帰動詞を用いた与格主格型
の格枠組みも一般的である。
 - ・ 3 類の動詞は、主格属格型である。
 - ・ その他の類の動詞は、主格対格型をとるものとそれ以外の格枠組みをとるものが混
在している。
 - ・ 表 4 の左側には、主格対格型を基本とする動詞がおかれる。一方、右側は、主格対
格型以外の自動詞的な格枠組みをとる動詞がおかれ、また、名詞、形容詞、副詞を
用いた表現も多く見られる。
- (ii) 否定文の直接目的語が属格をとるか。
- ・ 動詞の類にかかわらず、肯定文で直接目的語が対格をとる動詞は、否定文では直接
目的語が義務的に属格をとる。
 - ・ 表 4 の左側におかれた動詞は、主格対格型を基本とするため、それ以外の格枠組み

¹¹ ここでの略号は、以下のとおりである：主＝主格，属＝属格，与＝与格，対＝対格，
具＝具格，位＝位格，前＝前置詞，名＝名詞，形＝形容詞，副＝副詞，助動＝助動詞，不
定＝不定詞。

をとることの多い右側におかれた動詞に比べて、「否定の属格」の現象がより一般的に見られる。

- (iii) 不定量を表すために肯定文の直接目的語が属格をとるか。
 - ・ 1A類（有接頭辞・限界動詞の場合）、2A類、6類の所有動詞は不定量を表すために肯定文の直接目的語が属格をとり得る。
 - ・ 他の類の動詞の場合は、今回の調査で取り上げた例文においては、概して不可能であるという結果が出た。1A類、2A類、6類の共通点は、顕在的な状態（1Aの場合は結果的な状態）を表すことであり、この意味が「不定量の属格」の条件となっているのではないかと推測できる。
 - ・ だが、他の動詞の場合もテンスとの関係や文脈的な条件等、検討すべき点が残されている。今回は結論を保留とし、今後の課題としたい。
- (iv) 語彙的に対応する自動詞、あるいは、自動詞的な格枠組みをとる動詞が派生可能か。
 - ・ 1A類の動詞は、語彙的に対応する自動詞をもつ。
 - ・ 2A類の動詞は、自動詞的な格枠組みをとる動詞が派生可能であり、なおかつそれを用いた表現が一般的である。
- (v) 動作が対象に変化あるいは影響を及ぼすことを表すか。
 - ・ 今回調査した他動詞の中では、「殺す」を意味する動詞だけが、動作が対象に変化あるいは影響を及ぼさないことを表せない。
 - ・ その他の動詞は、無接頭辞・非限界動詞の場合、動作が対象に変化あるいは影響を及ぼさないことを表し得る。

また、今回さらに補足的に追加した、「移動」、「感覚」、「相互行為」、「再帰」の意味を表す動詞の考察結果を加えると、確かに、Malchukov (2005)が包括的意味地図として示したように、二項述語と一項述語を連続的に捉え、また、述語が表わす事態への関わり方が異なる、動作者主語と経験者主語を区別し、多次的に他動性の問題を検討することは重要であるように思われる。おそらく、リトアニア語における二項述語の格枠組みと他動性の関わりに基づいて、以下のような意味地図を想定することが可能であろう。

図 3: リトアニア語における二項述語の格枠組みと他動性 (Malchukov (2005)を改変)



以上の考察は、リトアニア語の二項述語の格枠組みと他動性の関係を大まかにラフ・スケッチしてみたものであり、さらに詳細な調査・分析をおこなった上で、通言語的視野からの検討を加える必要があることは言うまでもない。

謝辞

本研究の調査のために、リトアニア語のインフォーマントとして協力してくださった、Jurgita Polonskaitė 氏ならびに Ramutė Bingelienė 氏（ヴィリニウス大学）にこの場をお借りして感謝の意を表したい。また、多くの有益なご指摘をいただいた査読者のお二人に、この場をお借りして、心よりお礼申し上げる。

参考文献

- Ambrazas, V. 1984. Dėl lietuvių kalbos veiksmažodžio morfologinių kategorijų. *Baltistica*, 20 (2): 100–110.
- DLKG: V. Ambrazas (ed.) 1994. *Dabartinės lietuvių kalbos gramatika*. Vilnius: Mokslo ir enciklopedijų leidykla.
- Genušienė, E. 1987. *The Typology of Reflexives*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Haspelmath, M. 1993. More on the typology of inchoative/causative verb alternations. In B. Comrie & M. Polinsky (eds.), *Causatives and Transitivity*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, 87–120.
- Haspelmath, M. 2003. The geometry of grammatical meaning: Semantic maps and cross-linguistic comparison. In: M. Tomasello (ed.), *The new psychology of language*, vol. 2. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum, 211–242.
- Holvoet, A., A. Judžentis (eds.) 2003. *Sintaksinių ryšių tyrimai*. Vilnius: Lietuvių kalbos institutas.
- Holvoet, A., L. Semėnienė (eds.) 2004. *Gramatinių kategorijų tyrimai*. Vilnius: Lietuvių kalbos institutas.
- Holvoet, A., R. Mikulskas (eds.) 2005. *Gramatinių funkcijų tyrimai*. Vilnius: Lietuvių kalbos institutas.
- Jakaitienė, E. 1973. *Veiksmažodžių daryba*. Vilnius: Mokslas.
- LG: V. Ambrazas (ed.) *Lithuanian grammar*. 1997. Vilnius: Baltos lankos.
- LKG: K. Ulvydas (ed.) *Lietuvių kalbos gramatika*. vol.2. 1971. Vilnius: Mintis.
- Lyberis, A. 2005⁴. *Lietuvių-rusų kalbų žodynas*. Vilnius: Mokslo ir enciklopedijų leidybos institutas.
- Malchukov, A. L. 2005. Case pattern splits, verb types and construction competition. In M. Amberber and H. de Hoop (eds.), *Competition and variation in natural languages: The case for case*, 73–117. London and New York: Elsevier.

- Musteikis, K. 1972. *Sopostavitel'naja morfologija ruskogo i litovskogo jazykov*. Vilnius: Mintis.
- Nedjalkov, V. P., Sil'nickij G. G. 1969. Tipologija morfoložičeskogo i leksičeskogo kauzativov. In A. A. Cholodovič (ed.) *Tipologija kauzativnyx konstrukcij. Morfoložičeskij kauzativ*. Leningrad: Nauka. 20–50.
- Nichols, J., D. A. Peterson and J. Barnes. 2004. Transitivity and detransitivizing languages. In: *Linguistic Typology*. Volume 8, Issue 2: 149–211.
- Paulauskienė, A. 1979. *Gramatinės lietuvių kalbos veiksmažodžio kategorijos*. Vilnius: Mokslas.
- Rackevičienė, S. 2001. Expression of Causation in the language of the Baltic Region. *Studies in Languages*, 36: 74–87. Joensuu: Joensuu yliopistopaino.
- Sakurai, E. 2008. Combination of past participles functioning as adverbials with main verbs in Lithuanian: Aspect and transitivity. *Acta Linguistica Lithuanica*, 59: 81–108. Vilnius: Lietuvių kalbos institutas.
- Savičiūtė, G. 1985. Parūpinamųjų veiksmažodžių semantika. *Lietuvių kalbotyros klausimai*, 24: 263–251. Vilnius: Mokslas.
- Savičiūtė-Naktienė, G. 1995. Lietuvių ir kitų indoeuropiečių kalbų kauzatyvų raidos požymiai. *Lietuvių kalbotyros klausimai*, 33: 110–123. Vilnius: Mokslas.
- Tsunoda, T. 1981. Split case-marking in verb types and tense/aspect/mood. *Linguistics*, 19: 389–438.
- Tsunoda, T. 1985. Remarks on transitivity. *Journal of Linguistics*, 21: 385–396.
- 櫻井映子. 2007. 「リトアニア語の状況語的過去分詞と主動詞の組み合わせ——アスペクト性と他動性」角田三枝, 佐々木冠, 塩谷亨 (編)『他動性の通言語的研究』, 107–120. 東京: くろしお出版.
- 櫻井映子. 2012. 「リトアニア語のヴォイス表現」『語学研究所論集』第 17 号. 東京外国語大学語学研究所: 97–116.
- 櫻井映子. 2014a. 「リトアニア語の自他交替——反使役を中心に」パルデン・プラシャント, ナロック・ハイコ, 桐生和幸 (編)『他動性の本質——日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』東京: くろしお出版 (近刊).
- 櫻井映子. 2014b. 「リトアニア語使役交替動詞対データ」『使役交替言語地図』国立国語研究所. (<http://watp.ninjal.ac.jp>)
- 角田太作 (2009) [初版 1991] 『世界の言語と日本語 言語類型論から見た日本語』東京: くろしお出版